

斬魂刀 × 創世器

空想自己満足

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

斬魂刀

それは死神が持つ、一人一つの日本刀。

創世器

それはアークスが持てる武器、一部の強者が扱えるアークス最高の武器。

思いつきのネタです。やりたいようにやる予定なので後々矛盾点が発生するかもしれません。一部☆13武器を創世器としています。そこら辺にも注意してください。

また、両方をよく知っていない方はブラウザバック推進。

第9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
115	102	86	73	54	41	27	12	1

目次

1話

シユトリル『ただいま戻ったよ。』

俺の名はイトン・シユトリル、一応次代六芒均衡に入る予定の男だ。少し俺の昔話をしよう。

俺は以前は情報部で活動をしていた。3年ほど前だったか、俺が次代六芒の四になる案がその時は出ていた。と言ってもあの敗者ルーサーさんが俺を推薦してきたからだ。その時だっってほぼ全てのアークスがルーサーさんがダークフアルスだと言っていることを知らなかったけど、俺も含めて。

まあ、その時は『うーん、仕事に影響しなきやいいですよ』と言う考えだったし、『エルダーが復活してしまったからねえ。やるべき事はやりたいんだ』ともルーサーさんは言っていた。でも六芒の内のマリアさんが『あんたが次の四だっって？その椅子、興味が無いなら譲ってくれないか』と威圧されたのでやめたさ、俺だっって若くして死にたくないしね。

そんなこんなで情報部で働いてたさ。俺の仕事は主に新惑星の探査や新エリアの発見。新惑星だとウオパルやハルコタン、新エリアだとアムドウスキアの浮遊大陸や龍祭

壇それにウオパルの全エリアに携わったかな。後はクラリスクレイスの監視と護衛、と言ってもあの六芒の六であるヒューイにすぐ見つかった。事情を素直に話したら何か一緒にパーティーを組まれたけどね、ついでに俺のサポートパートナーも一緒に行つたよ。クラリスクレイスが故意なのか分からないが、つて……絶対面白半分で何度か法撃してくる事に慣れてしまった事をカスラさんに話したら笑われた事もあつたけど。あの頃は楽しかった……と思う、法撃がモロ直撃したときは死ぬかと思つたけど。で、その後は色々あつて次代六芒の六になるためにヒューイさんの下についてる。

……いや、ヒューイさんが『お前も六芒の六になれ!!』つて言つてクラリスクレイスまで『そうだ、私の為にキサマは六芒になれ!!』つて、ごり押しされたような気もする。よくクラリスクレイスのおもりを任されているが……うん。

俺のサポートパートナーとはやたら仲が良かったから基本は俺のサポートパートナーに任せた。一時期険悪ムードになるときもあつたりしたけど雨降つて地固まるのか、より仲良くなつたさ。本当は最初にヒューイさんにバレたとき全部教えて貰えたんだけどね。ルーサーさん何やつちやつてんのさ。まあ、ダークファルスだと発覚した敗者ルーサーはすぐさま討伐。惑星シオンを失うことにはなつたけど、代わりにシャオが来てくれた。

で、マガツや深淵なる闇との戦い以降、アークス全体での組織がまたガラリと変わつ

た。俺は戦闘部メインの情報部みたいな感じだ。深淵なる闇との戦い以降、アークスの数が増えてきて一部の戦闘部メンバーは新人教育ということで新人アークスを一人辺り二人ほど面倒をみる事になったけどな。あの時見たいで楽しいけど、またあの四人でどっか行きたい物だよ。

趣味は超時空間エネミーのタカミカズチの観察と研究。かれこれ15年くらいはやってるかな、論文も出したことあるし。原理はよく分からないがあいつら脱皮みたいなのをやる。主に顔や腕や足節々に爪。

そして脱皮した皮を使い研究する、と言っても付着している土などからいつどの惑星に空間移動したのかと言う物を調べるだけだが。

まあ、ある日誰が見ても分かる感じのかなり質がいい脱皮した皮が取たのがジグさんに見つかってしまい。『頼む。その素材で御前さんに合う武器を作らせてくれ。』とせがまれたのでしぶしぶ承諾して出来たのが創世器だった。あの時は腰を抜かしたけどな。それが原因で六芒の四に推進されたのもあるんだよな、今となつては昔の話だけど。案外ジグさんとも長いつきあい何だよな、最初会ったときやる気が出ないとか言つてニート気味だったのに。

その後も『あの武器……。もう一度見せてくれないか?』といわれて渡したら名前も姿も変わって帰ってきたよ。何なのこのじいさんは? 『あの時の余った材料と新しい材料

を組み合わせみたんじや。どうかの?』とかほざきおつて、フォトンの消費が尋常じゃない、フォトンが減りすぎて気節しかけたレベルだったぞ。

まあ何とか戻せたから良いけど。

とりあえず。俺はヒューマンのガンナー／レンジャーで男。チームには一応入っている。大抵のやつが俺が創世器一応『雷銃タケミコウガ』を持つているから戦力としてもエースとしても向かい入れたいだけだと思う。まあ入ったチームは、『創世器だがソーセージだが知らんが戦闘部メンバーに連絡入れるの凄く面倒なんだ。だからさつさと入れ。あ、XH任務ソロでも行ける口だよな。』等と言われたから入ったけどね、俺としては仕事や趣味の邪魔になんないやいい。てか、このリーダーもエースも何人か創世器をこっそり持つてるのよね。案外創世器で珍しく無いのかもしれない?と思っただけど俺の創世器は:。その時話すか。

マキナ『お帰りマスター。例のエネミーはいましたか?』

今話しかけてくれたこの子はマキナ。俺のサポートパートナーだ。やたら心配症で誰とでも仲良く接してくれるし優しい女の子:。ただ怒ると怖いし毒舌。クラスはフォース／テクターまたはサブレんジャーにしてあげてる。俺以外で一番仲が言いはやはりクラリスクレイスだろう。人を的にまでして一緒に練習してたしな、いやな夢だった。隣のヒューイさんは何か法撃を創世器で弾いてたけど結局食らって吹っ飛ば

されたし、周りにいたエネミーも逃げて俺までも吹っ飛ばされた。その犠牲も絶対、絶対にあつて法撃職専用の必殺技を覚える。不要な犠牲とか言わないで、うん。

髪はロングストレートで少し明るいクリーム色、赤い眼鏡をかけていて水色の瞳をしている。顔はちよつと幼い感じかな？顎を上げた時にほくろが一つ見えるのが特徴。身長はクラリスクレイスより少し低いかな？

リユシ『私達、帰れますかね。』

ナーコヤ『お姉。フォトンがあればなんとかなるよ』

俺が面倒を見ている双子の兄弟。姉のキャツス・リユシに弟のキャツス・ナーコヤ、二人ともレンジャー希望だ。初めはガンストラッシュを覚えさせた、次にライフルランチャーを覚えさせてとりあえず基本の動きは出来るようになった。で本来は地球での合同練習のはずだった。

兄弟達はフォトンがあればなんでも出来ると思っっているみたいだが、こういう自体つまり船の空間移動が狂ってしまったこの事態は治せない。動くには動くのだが座標位置がおかしい。本来オラクル船団があるところに行けるのに行けないし通信機器も壊れている見たいで連絡が取れない。

兄弟達の性格の根本みたいのは似ている。スイッチが入ると強いが入らないと弱いそんな感じだ。姉の方は攻めるタイミングを分かっているみたいで押しに強いが引き

際を知らないのか突っ込み過ぎる所がある。逆に弟の方は引き際をわきまえているが中々大胆に攻めれない、そのおかげで余りチャンスを活かせないでいる。姉は赤毛のポニーテールで弟は青黒い短髪。身長はクラリスクレイスよりちよい上かな。双子の間では身長の違いは無いように思う。

本来は地球について教えるために新人教育を任されてるアークス全員での合同練習みたいのをしようってなったはずなのに……。俺ら四人だけ地球じゃない地球にいる。

原因は何となく分かる。地球に向かう時チーム船の後ろをついて行った。ちよつとした移動の時はこつちが便利だからだ。別に後ろからついて行ったって何も問題ない、現に他にもいたからな。原因はワープゲートを潜ってる最中でのエネミー衝突。船が衝突しないように設計はされているし何より看板に残ってたこのかけた爪。このかけた爪を俺はよく知っている、超時空間エネミータカミカズチの爪……。だと思いがダーカー因子の反応がかなり濃く出たのは気になる。タカミカヅチがダーカーに汚染されたと言う、でも今はそれよりも問題がある。

シユトリル『いんや、駄目だね。昼間でもウロウロいるよ。それよりダーカーが多すぎるせいでまともに探せない上にダークファルスみたいな黒い奴も沢山いて上手く動けない。』

かつてシャオから聞いた話だと昔は沢山のダークファルスがいたとか。つまり過去

に來た可能性がある。過去の地球に昔はフォトンに似た技術は無かったとされている、今この地球がそうだ。

しかしだ、その地球にダークファルスがいるのか？

ダーカーもいるし。地球に関する資料を読んだ時、『ダーカー等の侵略は無かった可能性が大いにある。理由は地球の地層を調べたとき少なくとも我々アークスと交流前までの300年はダーカー等の生物はいなかったとされている。しかしなぜフォトンに似た技術がここまで発展しているのかは不明。』があつた。

でも原生生物は地球人である、これは間違えない。明らかに人型の知的生命体である。しかしフォトン等の自分が知っている物以外の何かが大気中を漂つてゐる。しかも黒服の周りから発生しているように感じる。ダーカーとは別の気配。とりあえず、この星での2日間がたつた。でも悪いことばかりでは無い、今日分かつたことがある。

シュトリル『あの黒い服の奴も多分原生生物で知的生命体だ。今日ダガンを倒してたんだよ。結論から言うと味方になり得るかも知れない。そして刀しか基本使わない』

ナーコヤ『あの蜘蛛のダーカーをですか？刀だけで？』

そう、今日ダガンを倒してゐるのを見た。だからこそ接触すべきだ。ダーカーはフォトンじゃないと浄化出来ない。彼らがダーカーに取り込まれる前に下の人とでも良いから接触し無ければならない、アークスの役割としても。それに体の真ん中に穴が間奴も

いた。話を聞こうとしたら『ああん？オメー食べるのか？食って良いのか？』なんて敵対心ありありだったのでとりあえず気節させた。倒してはいない。けどあの黒服は穴空き野郎を斬っていたから穴空き野郎達も黒服の敵なのかも知れない。

シュトリル『ああ、さてと。久々にこいつの出番か……。改造劍影、持ち歩いて良かった。』

マキナ『それですか……。なら私達はガンスラツシユですかね。』

リュシ『ガンスラツシユはもう慣れてるよ。切って打ってやる。』

シュトリル『黒服はやめろよ。一応俺の創世器も持って行くか。ライフルやランチャーはその黒服に見せるなよ。ややこしくなりかねないからな。』

ナーコヤ『お!! ついにシュトリルさんの創世器が見れるのですね。』

シュトリル『と言つてもお前らは明日さ、その時は全員フル武装で。今から接触しても大丈夫そうな奴の目星だけ見てくる。』

と言つてシュトリルはまた出ていく。

因みに拠点の山は山の洞窟、少し中は広め。拠点として活動するには俺は問題ないがやはりこの双子はそうも行かないみたいだ。もうフォトンに乱れが出てきている。速い所少なくともこの星の基準値をみたす程度の衣食住はしないとこの双子は精神的に辛い、俺はこう言うのは慣れてるけど。入口は回りの背景をフォトンを使って同化させて

いる。そのため触ってみないと分からないはず。また、改造剣影は固定PAとしてグレンテツセン入ってるだけで後は変わらない。

シュトリル『さてと。また使ってみますかね。：：大丈夫だよな?』

と言つてシュトリルは研究チームが作成した道具を使う。完全に見た目は靴で足に履いて使用する物。その道具はダツシユボードを使わないでダツシユボードを使ったみたいに加速できる高速化と、姿や気配に声などを完全に消し、衣服を含めた体全体を透明にすることが出来る隠密化、そして一瞬だけフォトンで足場を作り空中を移動出来る空中移動の三つが使える代物である。

シュトリル『何処かの暗部じゃ無いんだしいらないんじや。：：と思つてたけどかなり便利で役立つてます。けどフォトンの消費が結構酷い、全部やったらまともに攻撃は無理だろう。あの双子はどれかしが使えないだろう。さて、とりあえず隠れながらだ。この隠密化はフォトンの消費が他より下手をしたら3倍以上ある。それに高速化を使っているんだ。人がいたら止まって観察かな。』

確かナツシユの奴にはこの隠密は効かないらしい。あのクーナの奴でさえ見破れると聞く。つまりこの隠密は必ず100%見つかからないという補償は無い。だからあの黒服に見つかると言う可能性はある。それにあの黒服は瞬間移動見たいのをする。恐らく大気中の別の何かが奴らの力だろう。観察はタカミカツチで慣れている。時間

は正午を超えた辺りだろう。

シュトリル『（ここ）で良いか。あのアフロのおつちゃんなら大丈夫か？横にいる赤紙のツンツン野郎はだめかな。恐らくだけどあのアフロさんは警備員みたいな所。つて、ん？）』

高速化のみやめ茂みに身を潜め、全体を見渡せるちよつとした崖の所にいる。そして隠密化を使用しているのだが……。目の前に黒い獣がいる、確か猫という奴だったと思う。別にいるのは問題ない、屋根や道にゴロゴロいる。問題なのはこつちを見ていることだ、と言うかシュトリルとこの黒猫の目が完全に合ってる。そこでシュトリルは指を一本立てて、左右に腕事ゆつくり揺らしてみる。しかし、それには反応しなかった。

シュトリル『もしかして何かいると分かっている姿が見えてないのか？……服装だけ変えて隠密化もといってみるか。』

すると隠密化をとく前に黒髪のツープロを大きな帽子で隠すようにかぶり、赤い縁のグラサンをかける。服装は向こうの地球の東京観光をする時と同じ服装に変化をする。そして隠密化を解除した。

するとその猫は目を丸くする。

シュトリル『えーと……。猫ちゃん何してるの？』

黒猫『……』

特に反応は無かった。そのままシュトリルは黒服達の観察を続ける。がしかし。

シュトリル『…（あく、何で見つめてくるの？…撫でて欲しいのか？）』

シュトリルは頭を撫でようとする。それを黒猫はかわす。アレー？と言う顔をシュトリルはする。それを見た猫はシュトリルの手が届く位置にまた座る。しかし触らせてくれない。

シュトリル『俺、遊ばれてる？』

黒猫『…』

すると、大きなダーカーの反応がする。レベル的にH帯のダーカーだがこの感じは恐らく大きいダーカー。そしてダーカーが出現前に出る赤黒い球体が現れ、ウォルガーダが出てくる。

ウォルガーダ『グオオオオオ!!』

黒猫もシュトリルも構える。

2話

シュトリル『：：：どうしてこうなった。』

俺の名はイトン・シュトリル。一応次代六芒均衡に入る予定の男だ。今俺は戸惑っている、だからちよつと前の話をしよう。

俺はあの時ウォルガーダと交戦していた。

シュトリル『（：： テッセン）』

シュツ、シュキーーンツ!!

PAを使い、ウォルガーダの前に行く。そして顔に向けてその一撃を放った。これがとどめの一撃になったのか、ウォルガーダは倒れ込む。

ウォルガーダ『グツ：：。』

完全に倒した。このダーカーのレベルが低いのもあつたおかげだろう、1分かからず倒せた。すると誰か近づいてくる。

車谷『んく？ここで誰か戦っていたような。まあいいか。』

シュトリル『（どうする。顔だけでも見せとくか？いや、今はまずいかな。とりあえ

ず、アフロの黒服達空飛べるとズルいだろ。』

車谷『あ、竜ノ介から連絡だ。もしもし?』

すると車谷はどこかへ行ってしまう。この街の管理を引き継ぐ行木竜ノ介のために色々と教えているのだろう。

シュトリル『いつちやたか。あれ? さっきの黒猫はどこ…に!?』

シュトリルが見た光景、それはウォルガーダがフォトンによって分解された時に出るダーカー因子に包まれている黒猫の姿であった。

シュトリル『おいお前!! すぐに治療してやるからな』

黒猫『シャー!』

黒猫の頭をよく見てみると体内にダーカー因子の貯めすぎによって出来ると言われている芽ができている。ダーカー因子はフォトンが無いと浄化出来ない、ダーカー因子を貯めすぎた者は自我を制御できなくなっていく凶暴になっていく。そして死んだとしてもその体はダーカー因子によって動き続ける。

シュトリル『とりあえずこんな目立つ場所でやると見られた時に勘違いされるかもしれない。その茂みでさっさとやろう。』

するとシュトリルはさっさか移動し、黒猫に少しずつフォトンを与えダーカー因子を浄化していく。

シュトリル『(間に合ってくれよ。)』

黒猫『… ツ!!』

その頃別の場所。

碎蜂『ん? 夜一様

(今一瞬。夜一様の霊圧が乱れたような…。! まだまだ、もしかして夜一様の身に何か。)

』

大前田『隊長、いったいどうしたんですか?』

碎蜂『大前田!! ここはお前に任せるぞ』

そう言うと碎蜂はどこかへ行ってしまふ。

大前田『え!?! 隊長!?!?』

二番隊隊員『副隊長危ないです!』

サイクロネーダが武器を振り回す、そして今その振り回してる鎖付きの鉄玉みたいなのが大前田目掛けて飛んでいく。

大前田『ぬおおおおお!?!? 打つ潰せ、五形頭!!』

互いの鉄玉がぶつかり合う。そしてサイクロネーダの鉄玉が打ち返されサイクロネーダのみ体勢を崩す。大前田は五形頭を手元にもどし。

大前田『こ、このお、オレ様に不意打ちなんて100年はえーんだよ、ばーが』

息を切らしながら叫ぶ。しかしイマイチ迫力がない。

場面は変わって治療中のシュトリル。

シュトリル『ふー。とりあえず、芽は潰せたけどさては後もう少し。この子ダーカー因子取り込んだの今回が初めてじゃないな、って

(またなんか近づいてきてる臭いつてか速いし。何でこの原生民みたいな奴は速いのかね。)

おい猫ちゃん、ちよつと俺の拠点まで行くけどびびらないでくれよ。マキナ、聞こえるか?』

マキナ『どうしましたかマスター?』

シュトリル『今から帰る、ダーカー因子に感染している奴を連れて帰るから治療の準備だけしといて。それと患者連れて船に退避してくれないか?』

マキナ『マスターは?』

シュトリル『大丈夫さ。宇宙で静にしてな。』

シュトリルは隠密化を使用しながら高速化を使用してそそくさと拠点に戻る。しかし、追ってくる気配がある。完全に真つ直ぐ追いかけると言う訳では無いが確実に近づいてきてる。その気配は碎蜂であることをシュトリル達は知らない。

碎蜂『なんだこの気配、死神でもホロウでも無い。夜一様の霊圧がその気配に覆い被

さっているのか、よく分からない。現世に現れたあの黒い奴らと同じで完全に掴めない、くそ。ん？夜一様の霊圧が消えた…?!）

夜一様!!!』

そして今、シュトリル達の拠点内部から宇宙に構えているシップに移動したときちよつとした事件が起きてた。

リュシ『シュトリルさん？あの…その…えーと…この猫、猫でしたよね』

ナーコヤ『でもそれ？あの…つまり…何というか…。これ女の人じゃ、しかもスタイルがいいよ、ゲフ!!』

マキナ『どうしますか、マスター?』

シップに戻るために自分の体は一時的にフォトンになる。しかし、この猫…人になった。もう一度言う、この猫は人になった。因みにナーコヤが殴られたが気にしないでおう。フォトンが原因で進化したのかとも考えたが、猫が人間に進化出来るのかと言う点では無理なような気もする。それこそこの猫がキャストとかと思っただ方がある程度しつくりくる。もしかしたらこの星の原生民の能力かもしれない。

シュトリル『と、とりあえず。このまま宇宙に避難してくれないか。この…猫?女性?まあ、とりあえず色々聞いてくれないか?ちよつと、外の相手とか色々調

べてくる。』

マキナ『わかりました。服は適当に選んどきます。』

シュトリル『頼む。さてと俺はフル装備に剣影付きかな？まったくこんな変な装備するのアップレンティス撃墜作戦以来だよ。マグも元気な内に行ってくるわ。』

山のシュトリル達の拠点付近にて。

碎蜂『さつき夜一様の霊圧が消えた。いったいどこへ、まだそう遠くには行っていないはず。』

シュトリル『あゝ、あいつか？後つけてきたの。あの猫？女？の知り合いかなんかだろう。』

碎蜂からはシュトリルの姿は見えない。しかしシュトリルから碎蜂の姿は確認できる。

シュトリル『さてはてどうしますか。戦って見ても良いけど絶対後々のやり取りが面倒くなる。それにあいつの技量が分からない。この剣影でどこまで持つか、さすがに創世器まで出すとさすがに周囲にばれて余計ややこしくなる。まあ、一人で動けるし、さっさか調査しますか。とりあえず、それぞれの拠点だけでも探るか。って何だあの背中の文字？……まあ、気にしても今は仕方が無いか。』

シュトリルは隠密化を使用して碎蜂の観察をやめてその場を離れる。

碎蜂『ん？誰だそこにいるのは』

碎蜂はシュトリルの気配に気付いた訳ではない、他の気配に気付いた。

『ふふ、ふふふ。』

『あは、あはは。』

不気味な子供の笑い声が碎蜂の周りを包む。碎蜂は自然と構えてしまう。

その頃、シュトリルは隠密化を使用しながらこつそりと山を降りていく。その事に碎蜂は気付かない。そして数分間下山しているシュトリル、その前に。

京楽『まったたく。現世に来たというのに、はあく。』

(ん?)

『

木に登って一人で杯に酒を入れて飲んでいる八番隊長京楽春水の姿があった。

シュトリル『(な、何だよあの人。木に登って……何飲んでるんだ？帽子みたいなのが被っているけど)』

京楽『君も飲むかい？』

そう言うと京楽はシュトリルが隠れてる茂みの方を見る。

シュトリル『(え?……まじかい。バレてるよなこれ。)』

京楽『どうしたんだい？隠れてないで出てきなよ、旅人さんでいいかな。』

京楽はやはりシユトリルがいる茂をみて話す。

シユトリル『(あはははは、笑うしかねえ。明らかに技量差があると思う。)
どうして分かったのさ』

シユトリルは服装や髪型などを元に戻し茂みから出る。すると茂みから黒髪のスパイクヘア―で黒のスーツジャケットスタイルを着て少しばかり貫禄がある男性が姿を現す、隠密化をときながら出てきたシユトリルである。京楽は驚いたような顔をして。

京楽『え？本当にいたの！いや、これまたびつくり。』

シユトリルは『おい。』みたいななんだか拍子抜けした顔をしている。さつきまでの貫禄が吹き飛んだようにも思える。京楽はにこやかに笑っている。

時刻はこの星で1時を超えた頃だ。

その少し前に時刻は戻り、学校にいる一護達。お昼休みで教室にいる。

石田『一護、これはどう言う事だ。』

一護『お、俺に聞かれても。』

茶渡『本当に知らないんだな。』

みんなが見つめる先にはコンがいる。先ほど近くにいたホロウとホロウみたいな奴を倒しに言った一護について行ったのだ。

コン『な、何だよ。みんなしてオレ様を見つめやがって、はっ。ねくさくん、ゲフッ』

ルキア『つて、コン。そのアクセサリーはどうしたのだ？』

ルキア目掛けて飛び込んでいったコンをルキアは踏み潰す。これと言つて珍しい光景ではない。しかしいつものコンの姿と少し違う。

コン『あ、これか？これはホロウみたいな奴の攻撃されてちよつとしてから出来た何かだ。男の勲章つて奴よ！』

石田『うーん。特に変わった所はないのか？』

コン『あ？別に何ともねーが……むしろ動きが良くなつたくらいだぜ。』

コンは特に異常が無いようにみえる。コンには小さな赤いたんこぶみtainのが左耳に出来ている。コンの動きが普段より活発的になつていような気もする、そんな感じだ。するとルキアが一護に話しかける。

ルキア『一護、これつて以前のホロウに生えていた物に似てないか。』

一護『ああ、確かに。尸魂界の方で何か解らないか。』

一護達は前にホロウと戦つた時、首の横から一つ今コンに生えているのと同じような物を見ている。

ルキア『解らない、ホロウには生えているのを何体か確認報告されているが死神はおろか、義骸でさえ出てないため、無害と今の所はされている。それなのに義魂丸であるコンに、しかもぬいぐるみに出てくるとはいつたい……。』

茶渡『そもそもあれはホロウなのか？ホロウ特有の仮面や穴がなかったが。』
ルキアは首を横に振る。

ルキア『それも解らない。ただそのなんとなく、なんとなくなのだがあの虫のホロウとは戦わない方がいいと思う。こう、戦った後になって背筋がゾワツとするんだ。』
すると

井上『みんな〜！』

井上が教室に入ってくる。

一護『お、井上か。』

井上『何してたの？』

石田『あ、そうだ井上さん。これ治せないかい？』

コン『コレとは何だ！コレとは！』

石田はコンに出来ている赤いでき物を指す。

井上『ん？どれ。何にコレ、おまんじゅう？』

一護『どう見たらおまんじゅうに見えるんだよ。』

突然『ぐ〜』と誰かのお腹が鳴いている。ホロウとホロウみたいなのを倒していたので、まだお昼を食べていないだ。そして茶渡が顔を赤くして。

茶渡『すまない、おれだ』

石田『あく、この話は放課後浦原商店に行つてから話そうか。』

井上『そうだね。』

茶渡『すまないみんな。』

所変わつて軽い飲み会状態の京楽と情報交換をしているシュトリル。シュトリルはこの世界の礼儀作法なのかと思いつつ、京楽にお酒を注ぐ。お互いに顔がよく見えるように座っている。かれこれ一時間は立つような気がする。

京楽『お？ありがとう。それであの黒いのホロウじゃなくてダーカーって言うのか。』
シュトリル『そうですね。で、あの仮面つけたのがダーカーじゃなくてホロウって言うのか。』

京楽『そうだよ。それでそのダーカーてのを倒しちゃうとダーカー因子って言う細かなダーカー？になつて体内に入り込む。でその体内に入ったダーカー因子を浄化出来るのが今の所フォトンだけって事で良いのかな？』

シュトリル『はい、所なんですけど……あなたお偉いさんですよ。』

京楽『ん？そうだよ。』

シュトリルにはそうには見えない。酒を飲んでいるおっさんにしか今は見えない。だが、見えないだけである。近づいてみてわかる、この人は相当な修羅場を乗り越えてきてる。少なくとも本気でやりあつたらこつちが負けるかもしれないということだ。

と、京楽がシュトリルに尋ねてくる。

京楽『今思ったけどさ、僕の中にもそのダーカー因子が入ってる可能性ってあるの?』
シュトリル『はい、えーと… 浄化してみます?』

京楽『た、頼むよ。僕だって自分の体の中に変な物が入ってると思うとちよつと…
ね。』

先ほどまで気楽にお酒を飲んでいたの京楽の顔が暗くなる。するとシュトリルは京楽の背後に立ち背中に手を当てる。ハタからしてみたら背後から殺しに来たようにも見えてもおおかしくない。

シュトリル『大人だから我慢してくださいよ。』

京楽『え? どう言う事。』

シュトリル『大丈夫ですよ。フォトンを流し込むだけですよ。ただ体に直接打ってやるので最初痛いんですけど。』

京楽『え? やっぱり僕はやめ。』

プスツと言う音になる。そして。

京楽『いた〜い!!!』

京楽の大きな叫びが周りに響く。きつとさぼって酒を飲んでた罰であろう。それに反応する者がいる。

伊勢『各班ローテーションで昼食を取ってください。怪我をした者は無理をせず、怪我を直すなりしてから動いてください。』

八番隊員『はい！』

ここは八番隊の拠点、シュトリルと京楽が話し合っている所からそう遠い訳ではない。シュトリル達が拠点として使用していた山と同じ山のふもとに構えている。

現在は各班ローテーションを組んで昼休憩である。

伊勢『はあく。京楽隊長はどこに行かれ』

伊勢は資料を持ち片手で持ち、どこか落胆している。すると突然。

京楽『いた〜い!!いた〜い、いた〜い』

と、山びこになって誰かの叫びが聞こえる。隊員達は『どうせまた酒でも飲んで転んだり、どっかから落ちたりしたんだろ』と思っている。

八番隊員『伊勢副隊長……どうしますか。』

伊勢『まったくあの人は、私が見てくるのでちよつと隊をまかせます。京楽隊長〜。』

伊勢はやれやれと言う顔をしながら京楽の所へ向かう。

伊勢『（ん？何でしょうかこの感じ。何というか……京楽隊長の霊圧がはつきりしすぎていますよな。）』

京楽隊長〜。』

伊勢は確実に京楽に近づいてきている。それは京楽にもシユトリルにもわかる。

シユトリル『……！』

(また誰か来てる。どうする?)』

シユトリルは何か考え込んでいる。それを察したのか京楽は。

京楽『大丈夫だよ。僕の部下がこつちに来てるだけだから。でも君、霊圧をよく探知できたね。君たちフォトンしか使えないじゃ無かったじゃないのか?』

シユトリルはどうしてだろうと考える。そして。

シユトリル『うーん、なんとなくですが、京楽さんの霊圧に触れているか大気中のその霊子をフォトンの換わりに吸い込んでいるからかと。』

京楽『君も解らないのか。あくでもなんだか体が楽になつて来たよ。』

フォトンには色々な作用がある。疲労回復や解毒、痛み止めなど多種多様な効果がある。そんなこんなで会話している、そしてそれを空高くから見つた伊勢は。

伊勢『京楽たい……!!京楽隊長!!』

(あれは誰?!人間に見えるけどいったいどこ。今は追いつくのが……あ、あれ?)』

伊勢は自分が見ている光景を整理する。最初は京楽が不意打ちで背後を取られたなんて考えていたが、京楽はのんきにお酒を飲んでいるのが確認できた。京楽の後ろの人は真剣そうに何かをしているが、むしろ上京した息子が故郷にいる父親の肩をもんでい

るなんて表現した方が近いような、そんな感じに見える。

京楽『あ！七雄ちゃん。こつちだよ。』

伊勢『あの、京楽……隊長これはいったい？』

京楽『ん、ああこの人のことかい？いやね、ここでのんびりとお酒飲んでたらね、さつきばつたり会つちやつて』

笑っている京楽、そしてその京楽に近づく伊勢。伊勢はどこか怒っているようにも見える。そんななかゆつくりと近づく敵に3人は気付かないのであった。

3話

シュトリル『創世器……なのか？』

シュトリルの前には京楽がいる。始解状態でだ。やはり隊長と言うだけあって貫禄がある。しかし、敵はノーヴ・リングーダだ。全体黒い体に体の輪郭を表すように赤い線のラインなどのほぼ2色しかない体でケンタウロスのようなダーカーである。ブリュー・リングーダのレア種であり、刀ではなくてハルバードを武器として握っている。俺の名はイトン・シュトリル。一応次代六芒均衡に入る予定の男だ。話は少し戻る。あの時……怒られていた、京楽さんだけが。

伊勢『京楽隊長く!! (怒)』

伊勢は座つてる京楽の目の前に立ち、叱っている。しかし京楽はそれを最小限に抑えようとする。

京楽『七雄ちゃん、これには深い。深くい訳が。』

伊勢の顔がグイッと京楽の顔に近づく。シュトリルは思う。

シュトリル『……何か蚊帳の外なきがする。』

すると伊勢は顔を上げてシュトリルの方をみる。いきなりすることにシュトリルは軽

く驚く。

伊勢『で、そちらの方は？』

シュトリル『イント・シュトリルです。アークs』

京楽『あく!!彼は僕の飲み仲間なんだよ。ほら、一護君達みたいに僕らの姿見える一般人なんだよ。ねっ。』

シュトリルが話そうとしていた所に京楽割つて入る。しかし、伊勢はどこか納得していないように見える。京楽は笑顔で話しており、シュトリルに目線を送る。

シュトリル『…(あく、庇ってくれるのかな。ん?)』

シュトリルがどうしようかと考えている中、ダーカーがいる気配がするとシュトリルは感じ取る。ゆっくりと移動しているが、恐らく相当なすごいレベル。XHを超えているレベルだと思われる。

シュトリル『京楽さん、いたいけど我慢してください。』

京楽『…ん?…わかったよ。』

シュトリルの真剣な姿勢に京楽は悟ったのか大声を上げることなく、ただ自分の背中をさする。小声で『いてて。』と言っている。

伊勢『大丈夫ですか、京楽隊長。あなた!京楽隊長に何をしたんですか!?!』

しかしシュトリルには聞こえてないのか、シュトリルは違う方をじっと見る。すると

伊勢はシュトリルの頬をつねる。

シュトリル『イタタタ！静かにしてくれ。』

伊勢『話を聞いてますか（怒）』

眼鏡が白く光る。伊勢はシュトリルの頬をめいっばい引つ張った後、つねっていた頬から手を離す。つねられていたシュトリルの頬が若干赤く染まる。

京楽『七雄ちゃん、もういいだろう。』

伊勢『しかし京楽隊長。』

京楽『いいの。僕はこの人の治療を受けていただけだからね。それより気になる事があるんだよね。』

伊勢は納得していないような顔をするが京楽は真剣な顔をしてシュトリルをじっと見る。

シュトリル『京楽さん、ここで待って貰えませんか。ちょっと野暮用が出来たので。（この感じまさかだと思うが… マキナに連絡しよう。）』

シュトリルも仕事をする顔になる。そしてそう言うとき木の上から降りて茂みの中に入っていく。

京楽『七雄ちゃん。彼は僕の飲み仲間だと言うとここにしといてくれないか。』

伊勢『… はあ。わかりました。ですが彼が何者かのか教えてください。』

京楽のまじめな表情や目つきに伊勢は食い下がる。そして、少しばかり京楽が知っているシュトリルについて話す、時間にして10分程度。しかし、突然バキバキバキバキと多くの木が倒れ、少し黒い色がついた風が京楽や伊勢の所に吹き込んでくる。

伊勢『い、今のは!?!』

京楽『七雄ちゃんは今近くにいる死神を少しでも逃がすように八番隊のみんなと協力して頂戴。僕はちよつくら行つてくるよ。』

そう言うとき京楽は瞬歩を使い、スツと姿を消す。

伊勢『京楽隊長……』

伊勢は八番隊の拠点に戻り『隊長が戦うため巻き込まれないように避難しよう。』と八番隊の隊員に説明する。その事あまり納得しない隊員もいたがチームを組み、近くの他の隊の死神に声をかけつつ皆離れていく。

所変わつてシュトリル。

シュトリル『サテライトエイム!!』

バン!バン!と大きな音を立て雷銃タケミコウガの銃口先で大きな爆発がする。しかし、敵は効いていないように見える。

『なんだい今の?しよばい攻撃だね』

『??????』
『そうだね。下手な攻撃だね』

黒く塗られた硬そうな服を着ている男女二人組がシュトリルに向けて話す。そしてシュトリルに向けて手を構えるとその手からグワツと大きくギザギザなまるでパツク○ン見たいな攻撃をする。シュトリルはその攻撃を転がってかわす。

シュトリル『(マズいな。思ったように攻撃が出来ない。タケミコウガのフォトンの消費がいつもより激しくて攻撃にぶれが出る、しかもいつもよりかなり火力が低い。こんな状態で解号言って本気出しても俺のフォトンが持たないで先に気絶する。さらにあれはダークファルスダブル、深淵なる闇と一つになったんじゃないのか。てか、どうしてここにいる。』

マキナ『イル・メギド。』

ダブルに向けて法撃を放つ。しかしダブル達ふたりは1度消える。そしてその攻撃を放った方向とは別の場所に再び現れる。

ダブル男『全く。野蛮だねアークスは』

女の子の方は男の子を壁にするような感じでヒョコツと顔をだす。

ダブル女『攻撃的だねアークスは』

シュトリル『(ならリアリティーを下げてこいつでいくか)

フローズンシューター。ウィークバレット装填。』

ダブル男『残念だけど時間切れ。』

ダブル女『そうだね。タイムアップ』

シュトリル『逃がすかよ!』

そう言うダブル達二人組に向けてシュトリルはワンポイントを放つ、オート16連射通常弾攻撃だ。しかしこの攻撃は一つも当たらずダブル達は消えてしまう。

シュトリル『クソ!どこいった。』

マキナ『大丈夫ですかマスター。』

シュトリルとマキナは近寄り互いに背中を合わせて全体を見る。

ダブル男『まだやる気なの。ならこの子の相手をしてなよ。』

ダブル女『そうだね。この子にやられちゃいなよ。』

ダブル達二人組の姿は見え、声だけが響く。そして、ノーヴ・リンガーダが出て来る。シュトリル目の前にマキナは後ろを振り返し確認する。

シュトリル『そいつはおまえの眷属じゃないだろ!!何でいるんだ!』

ダブル女『僕たちの能力忘れてない?』

ダブル男『あははは。じゃあがんばってね。』

姿は見えダブルはそう言う。しかしそれ以降ダブル達の声は聞こえずノーヴ・リンガーダと対峙することになった。

マキナ『恐らくXH帯のエネミーかと。マスター、フォトンの消費がいつもより激しい見たいですが大丈夫ですか？』

シュトリル『大丈夫だろ、なんとかさせてみせるさ。いきなり来るぞ。』

ノーヴ・リンガーダは二つの大きなハルバードを構え、赤い線が入っている黒い輪を二つ投げてくるがそれをすぐさま手元に戻す。そしてハルバードとその輪を合体させるような感じでレイザー攻撃のように地面と水平に真つ直ぐ飛んでいく竜巻攻撃をしてくる。マキナはミラージュステップでスーツと1度消えて回避する。シュトリルはノーヴ・リンガーダに突つ込む。ノーヴ・リンガーダのこの攻撃はノーヴ・リンガーダの周り約1mは安全なのである。

シュトリル『インパクトスライダー。』

安全圏に滑り込みつつ、射撃攻撃を放つ。ノーヴ・リンガーダの足に蹴りを放つがその足はピクリとも動かない。

シュトリル『かって〜』

シュトリルは渋い顔をする。ノーヴ・リンガーダは体全体をひねらせて回転攻撃をする。シュトリルにその攻撃が当たりシュトリルは飛ばされる、が地面着地したとき手を使い宙返りをしてすぐに体勢を立て直す。

マキナ『マスター！』

シュトリル 『マキナ！あれ打てるか？』

マキナ 『… 大丈夫ですか。』

マキナは何かを察したように話す。

シュトリル 『心配症だな。なんとかなるさ。』

シュトリルはアサルトライフルを構えて話す。しかしマキナは知っている、シュトリルがアサルトライフルを他人に教えられるほど使い慣れているが後衛としてだ。前衛としての経験は少ない、ライフル一本だけでXHエリアをクリアする奴らとは前衛のライフルの扱いでは天と地の差がある。だからマキナは不安なのだ、『マスターが倒れてしまわないか』と。基本後衛としてのライフルならなんとかなるかもだが前衛としてはいくらシュトリルでも厳しすぎる、経験が圧倒的に少ない。シュトリルの身を按じているのだ。マキナは心配そうにシュトリルを見つめていたが後ろを向いて走り出す。

マキナ 『しばらく耐えてください、マスター。』

しかしノーヴ・リンガーダはそれを見逃さない。が、バババつとノーヴ・リンガーダの顔に当たる。シュトリルのアサルトライフルによる攻撃だ。

シュトリル 『無視すんなよ。』

ノーヴ・リンガーダはシュトリルに向けて突進攻撃をする。シュトリルはそれを交わす。そしてノーヴ・リンガーダとある程度の距離が出来る。ノーヴ・リンガーダは自分

が持っている黒い輪を投げる。その輪はしばらくするとその場で止まり地面から1、2m浮いた所で回転のみ行っている。そしてその輪は黒い風、さっきの攻撃で放ったドライバー因子を回収している。もう一度あの竜巻攻撃をするきなのだ。

シユトリル『ウイークバレット。サテライトカノン』

黒い輪に赤い印が付き、攻撃が当たる。しかしそれはノーチャージのため余り威力は出ない。ノーヴ・リンガーダ本体はシユトリルに向けてハルバードを振り下ろす。それをシユトリルは交わすがシユトリルは避けてばかりの防戦いっぽう。

シユトリル『エンドアトラクト、もう1発』

今度はノーヴ・リンガーダめがけゼロ距離から攻撃をまたする。しかしこの攻撃もチャージ出来るのにノーチャージで打つ、2連発でだ。

シユトリル『(うっ！…あれ、頭がポート。)』

シユトリルはフォトンの使いすぎで倒れそうになる。だが普段のシユトリルならこんな事にはならない。しかしこの星、この地球のフォトン通常よりもかなり少ない。そのためフォトンの回復が追いつかないのだ。それを気付かずシユトリルは攻撃を行っていた、創世器が上手く使えなかったのもこれが理由である。シユトリルがひるんだ隙を敵であるノーヴ・リンガーダが見逃すわけなくハルバードを大きく振りかぶりシユトリルめがけて振り下ろす。

マキナ『もう少し……。』（フォトンが集まりづらい。マスターもう少しお待ちを。早く、集まって。）』

ここから少し離れた場所でシュトリルの無事を願うマキナがいる。砂煙が上がっているためいい感じで隠れているが、マキナからシュトリルの姿は確認できない。しかしフォトンは確認できる。そのためシュトリルが弱っているのを把握できてしまうのだ。

シュトリル『（あ、やばいな……。これは）』

ノーヴ・リンガーダの攻撃によりより大きな砂煙が舞う。ノーヴ・リンガーダのハルバードには地面に食い込んでいる。それほどの威力の攻撃だったのだ、シュトリルの姿は無い。

京楽『いやー、本当危ない所だったね。大丈夫かい？』

シュトリル『……。すいません、京楽さん。』

京楽が助け出したのだ。ノーヴ・リンガーダの攻撃が決まる前に京楽が助けたのだ。

京楽『しかしなんだいいいつは。物騒な色合いといい武器といい。』

すると通信が入る。マキナからだ。

マキナ『マスター、後10秒ほどで打てます。』

シュトリル『わかった。さて、射程圏内にこいつを誘導しないと。京楽さん、一つ頼まれてくれませんか？』

京楽『ん？なんだい。』

シュトリル『あの黒いドーナツ一つ破壊できますか？あれがこいつの弱点見たいな物なんで』

京楽『：：よし、わかった。おじさんちよつとだけ本気出しちやおうか。』

花風紊れて花神啼き天風紊れて天魔嗤う 花天狂骨』

京楽は構える。そして始解をした。それを見ていたシュトリルはこう思った。

シュトリル『(創世器の解号か?!?!?!なんでこの地球にいやこの星にある?)』

そして今初めてシュトリルはこの星の原住民の誇りや魂などを京楽にわずかに与えたフオトンから感じ取る。

シュトリル『創世器：：なのか』

京楽『凄いでしょ。隊長クラスの斬魄刀解放は初めてかな。』

マキナ『マスター、そちらの方は?』

通信機からマキナの声がする。

シュトリル『いや、この話は後だ。』

ノーヴ・リンガーダもこちらに気付いたのか、突進してくる。しかしシュトリルは冷静に攻撃をする、今そんなことを考えている場合ではないのだ。シュゴーン、ピキューンと音が鳴り放つ。

シュトリル『… エンドアトラクト。』

放たれた攻撃はまだウィークバレットが残っている輪をとらえて攻撃が当たる。するとパンつと大きな音を立ててその輪は破裂する。その音があったのと同時にノーヴ・リングーダは足を踏み外し、少し体制が崩れる。それを見たシュトリルはウィークバレットを再装填する。

京楽『さて、僕もソロソロ行くよ。』

シュトリルは京楽が狙っている輪に向けてウィークバレットを打つ。そして体制を直したノーヴ・リングーダ本体にワンポイントを放つ。するとノーヴ・リングーダはシュトリルを目標に攻撃をする。追ってくるノーヴ・リングーダをシュトリルは誘導する。そして、マキナの攻撃の射程圏内につく。

京楽『色鬼、黒！』

京楽は次々と切り込む。そしてパンつとまた大きな音を立ててその輪は破裂する。するとノーヴ・リングーダは倒れ込み、赤いコアが胸元から露出する。

シュトリル『マキナ、今だ！おまけにウィークバレットだ。』

通信機に向かってシュトリルは叫ぶ。そしてそこから多少距離をとる。マキナは右に紫色のサッカーボールぐらいの大きさの玉を持ち、左は右と同じ大きさの赤色の玉を持って持っている。そしてそれを重ね合わせ。

マキナ『フオメル……ギオン!!』

その2つを自分の胸元付近で合わせ攻撃を放つ。赤と黒の混合したレーザーみたいなのがノーヴ・リンガーダのコアをとらえる。その攻撃によってノーヴ・リンガーダは完全に息を絶え、黒い煙がノーヴ・リンガーダから出る。ダーカー因子だ。

シュトリル『ナイスマキナ。』

マキナ『マスター……。ふう』

マキナはひよこんと座り込む。今の攻撃でフオトンをかなり消費した物ある。するとスツ京楽が表れる。

京楽『な、なんだい今の？この子がやったのか!?!』

マキナ『は、はい。』

赤い眼鏡をかけ直し京楽の顔を見ながら話す。

京楽『ん、七雄ちゃん?』

マキナ『え?私マキナです。マスターことシュトリル様のサポートパートナーをやらせていただいています。だからその、人違いかと。』

マキナはワタワタと話す。京楽は再度確認する。すると後方から。

伊勢『私はこちらですよ。京楽隊長。』

シュトリル『お前さんもきたのか。てか京楽さん、よく自分がシュトリルだとわかり

ましたね。』

京楽『まあ、君の霊圧はもう覚えたからね。変装した所で意味がないよ。それが君の本当の姿かい？あ、七雄ちゃんもお疲れさま。でももう警戒解いてもいいと思うよ。』

伊勢『案外あつさりとおわつたみたいですが。』

シユトリル『まあ、課題も見つかつたし。故郷には戻れない状態には変わりないんだよな。』

シユトリル達は気付いていない。森の茂みからこちらを見つめるダブル達とたくさんの死神の姿に。戦いはまだ序章にも行っていない。

4話

シュトリル『：（この星に飛ばされてもう五日目、船の燃料はまだまだあるがどうしたものか。明らかに食事の質は落ちてきているし、いまだに京楽さんと伊勢さんは目覚めない。それに猫だった女の事も早めに対処しないと行けないがダークファアルスの事が今一番にやんなきゃなんない事だろう。でも今の俺達じゃああのダークファアルス達の相手は無理だ、戦力差が酷すぎる。医療設備もそうだ。そのためにも早くアークスシップに連絡をしなければこの星はダークファアルスの根城となってしまう。打開策は無い物か。最悪この星を：いややめとこう、この考えは。でも、）
どうするか：。』

シュトリルとマキナ達は怪我をした京楽と伊勢を治療している、場所はシップの治療室だ。ここなら静かで医療設備があるがどれもマザーシップまでの時間稼ぎ程度である、それ程多くはなくモノメイトなどを薄めて一部薬品は代用している。ダーカーの攻撃を思いつきり受けてしまったのだ、つまりダーカー因子の浄化が必要である。今この四人はシュトリル達の船にいる。シュトリルは窓の外から見える地球を覇気のない目で見ている、顔には疲労感もでていてシュトリル自身も精神的にもきついように見え

る。

マキナ『マスター……。』

船のゲートからマキナが出て来たのだ。シュトリルは気づいていないのかそのまま窓の外にある青く大きな地球をみている。マキナのか細く悲しい声はシュトリルには届かなかった。マキナは一呼吸して、わざと足音を立ててシュトリルに近づく。さすがにシュトリルは気づきいつもの顔に戻りシュトリルは話す、自分は大丈夫だと言つてみたいに。

シュトリル『マキナ、お疲れさま。京楽さん達の様子は？』

マキナ『最初の頃よりはかなり安定してます。』

シュトリル『そうか、なら俺の番だから行くよ。マキナは休んでいな。』

マキナ『ですがマスター……。』

マキナは悲しい顔をして話す。マキナはマスターであるシュトリルが倒れてしまわないかと心配なのだ。

シュトリル『大丈夫だつて、俺は様々な危険な作戦に参加してほとんどの任務でも大きな怪我もなく帰還してるんだ。心配しすぎだ。』

シュトリルはマキナに近づき頭をなでる。そしてマキナを置いて京楽達がいる治療室へ向かう。しかしマキナが突然シュトリルの服を引っ張り止める。

シユトリル『…心配しすぎだよマキナ。』

マキナ『違いますマスター、私はマスターの事が』

声が少し震えている。マキナはわかっている。シユトリルの体も心も疲れ切っている事に。肉体は吸い過ぎだダーカー因子のせいで残り少ないフォトンが更に少なくなり立っている事がやつとなはずなのに、更に精神はそのダーカー因子によって蝕ばれ崩壊しかけている事を。

シユトリル『マキナ、大丈夫だって』

マキナ『ふふ、なら死んで下さい。』

シユトリル『おいおい。』

マキナ『冗談ですよ。まあ、突っ込めるので大丈夫ですよ。異常あつたらすぐに知らせ、ムグツ!』

マキナの口にシユトリルは人さし指で蓋をする。

シユトリル『じきキャツス兄弟が帰ってくるんだ。出迎えの準備でもしてあげな。』

シユトリルはマキナに背を向けながら歩いていく、京楽達の治療のために。そして軽く手を降つてこの船のゲートに入る、向かう場所は京楽達がいる治療室へ。

そしてその治療室

伊勢『うっ!…うーん、ここは。』

伊勢は自分の状況を確認する。服はそのままだが焼け焦げた後や切り傷なんかがある。ところどころ胸や足、手に腕など心拍数をはかるための機械が付いていることがわかった。そして何よりきになった所は自分の胸に枯れた草見たいのがあることだ。

伊勢『えーと。私は何をすることで…。』

伊勢は必死に思い出す、色々な事を遡りながら。

私の名前は伊勢七緒。護廷十三隊八番隊副隊長。今日は確か現世での嘘モドキの討伐だった。で、えーとお昼後京楽隊長が八番隊の撤退命令を出したはず。そんなことを思い出していく七緒。そして

伊勢『そうだ。私はあの時…京楽隊長に助けられたんだ。』

話は遡る。ノーヴァ・リンダーガを倒し、軽く話していたあの時からだ。

シュトリル『京楽さん。これからどうします？』

座り込みながらシュトリルは京楽に話しかける。アークスにとってフォトンは大物である。そのフォトンがこの星はやはり少ない。いまだに原因は不明、宇宙からの大気中フォトン量はナベリウスやリリーパと変わらないはずなのにいざ実際に降りてみるとフォトン量がひくい。この原因がわからない限り地上での戦闘行為はどんな敵

でも油断出来ない。京楽がまだ始解状態である。少し考えあごに手を当てて『うーん』とうなっている。

マキナ『マスター、一度シップに帰還したほうがいいと思います。私もちよつと。』
そう言ううとマキナはふらつき倒れてしまう。

京楽『おい。大丈夫かい。』

伊勢『…一度瀨靈廷で見て貰った方が。』

シユトリル『瀨靈廷?』

シユトリルがそれはなんですかと言わんばかりの顔をする。よく見るとマキナも地面に寝そべりながらも目を半開きにして聞いている。

京楽『ほら、ぼくとお酒飲みながら話したとき少し話したじゃない。この星の隔離空間とか何とか言ってたけど。』

シユトリル『あゝ、確かに言っていましたね。』

マキナ『すいませんマスター。電池切れ見たいです。』

伊勢『電池切れってあなた機械じゃないんですから。』

そんなことで話していると一人の見知らぬ死神が近寄ってくる。

京楽『ん?ちよつとそこの君。ここで何してるの、ここには?!』

突然その死神は瞬歩を使い、奇襲を仕掛ける。そしてその奇襲の対称は京楽であつ

た。始解していたおかげもあつたのかその奇襲は防げた。見知らぬ死神と京楽の刀がぶつかる。しかし見知らぬ死神の顔は涙を流し、泣いていた。

見知らぬ死神『京楽隊長……。お、お逃げ……。くだ。さい。』

するとその死神は体全身から黒い煙を出して人形のように倒れ込む。京楽はその煙に包まれてまうが口を袖を使いその煙を吸わないようにする。そしてもう一つの手を倒れてしまった死神の腕をつかみその場から逃げようとする。

マキナ『マスター!!これって。』

伊勢『京楽隊長!!』

シュトリル『後ろかも4人來てるぞ。』

先ほどの死神とは違い目が赤く虚ろで、体から黒い煙を出している。シュトリルはいち早く行動し、グレネードシエルを一人に一つ攻撃を放つ。一人、二人とその攻撃はあたり、上半身だけ攻撃の爆発で吹き飛ぶ。そして飛び散った肉はまるで豆腐のようにもろくジャムのようにべたついていた。残っていた下半身もその場に膝から倒れ込み活動を停止するが、まるで水にドライアイスを入れたかのようにブクブクと泡立ちあふ黒い煙を精一杯あげ最後の足掻きと言わんばかりの行為をする。しかし残り二人はその攻撃を避け、伊勢に向けて攻撃をする。刀を両手で握り、人を一刀両断にするがごく大振りで攻撃を放つが。

伊勢『…』

見知らぬ死神3『…』

ザシュツツという音の後に、斬りかかってきた方が斬られると言うカウンターを喰らい、ヨロヨロと倒れそうになるがまた大きく振りかぶって攻撃をする。

伊勢『そんな大振り、隙だらけ。』

しかしその攻撃は避けられたものの、突然胸から刀が飛び出してくる。もう一人が仲間を盾にしつつ伊勢の心臓めがけ、仲間の肉体ごと刀で貫こうとしたのだ。

伊勢『!!』

見知らぬ死神3『あゝ。あつ。あつく』

見知らぬ死神4『…』

その攻撃はグサリと伊勢の体を突く。だが、心臓までその攻撃は届かず胸に2cm程度の深くもない傷を作るだけであった。肋骨の骨が防いでくれたのだ。伊勢はすぐ目の前の敵を力を入れ、声を出し斬る。

伊勢『はくくっ!!』

盾にしていた死神はいともたやすく真つ二つになり。後ろにいたもう一人も腹を大きく斬る。浅く刺していた刀も抜けて、その傷からゆっくりと血が垂れる。そして真つ二つになった死神はブクブクと泡立ちまた黒い煙を出す。と、パンツ!!とその死体と

なった死神の体から大きな音を上げる。伊勢の顔や体にもその飛沫や小さな肉片が着く。伊勢は服の袖で着いた物をはらう。しかし、伊勢に突然激痛が走る。胸が締め付けられ体の自由が効かずその場で座り込んでしまうが、体に力が入るように入らない。むしろ誰かに締めつけられるような感覚に襲われる。

伊勢『（な…なにこれ。）』

そこで伊勢は暗く閉ざされる。しかし一瞬、ほんの一瞬だが感じ取れた。あの見知らぬ死神の気配が消え、近くにあの人の気配を感じ取れたことを。

京楽『七尾ちゃん…大丈夫かい』

そう、そう聞こえた。たが見てはいない。感じ取れただけで見てはいない。聞こえただけで見てはいない。けれど京楽隊長に助けられた、と自分の魂が心その時の状況で憶測かもしれないがそう思う。

そう考えているウチに近づいてくる足音に気がつかなかった。焦った伊勢はすぐに上体を起こし腰にある刀を手に取りカーテンから出てきたと同時に刀を出て来た人物の首に向ける。

伊勢『（誰かくる!!落ち着いて…今!!）動かないで!!』

シユトリル『…お、おう…すまない、伊勢さん。俺なんだが。』

伊勢『…え?』

伊勢はそのまま動けず、ただただ視界がぼけて誰だかわからない相手に刀を受け続けている。警戒しつつ眼鏡を探す。片手はそのまま刀を向けて、余った手で眼鏡を手探りで探す。

シユトリル『あく、眼鏡その棚にあるよ。』

眼鏡を探す伊勢に対してシユトリルは眼鏡の場所を教える。そして眼鏡を見つけ、眼鏡をかけた伊勢は自分が刀を向けていた相手を確認する。しばらくじーつとシユトリルの方を見る。やつと目が慣れたのか気まずいのかわからないが10秒程度立つてからそつと刀を収め。

伊勢『す、すいませんでした。』

と、ベツトの上で謝る。シユトリルはコレといつて気にする様子もなく。

シユトリル『しやーないすよ。訳のわからない集団に襲われたんですから。』

伊勢『はーつ。：。（駄目だな私、こんなだとまた京楽隊長に助けられ。：）京楽隊長は!!』

シユトリル『その前に自分の事を心配しろ。まだ完全に完治してないんだ。：。まあ、ある程度元気みたいだから。とりあえずお前さんの完治をちゃんとやってからだ。背中、ちよつといたいけど我慢してくれ。』

シユトリルは話ながら伊勢の側まで移動し、伊勢の背中に触れる。チクツとしたのか

伊勢と顔が少し崩れる。

シユトリル『……まあ、はつきり言つて相当重症だ。今のダーカー因子の蓄積量が一般アークスの限界とほぼ同じだ。』

伊勢『あのく、それつてどういう事ですか』

ほわほわとした空気が流れ込む。

シユトリル『あく、うーん。そもそもお前さん達死神と俺らアークスの体の構造、特に容姿や力の根源とでも言えればいいものかが結構似ている。と言つても容姿の面は丸々機械で出来ているアークスもいるけどな。』

伊勢『色々気になる所はありますけど、とりあえず力の根源ですか？』

シユトリル『そう、俺らのフォトンとそちのフォトンみたいなのがな。天使と悪魔とか狩る者と狩られる者みたいな絶対的敵がいて、空気中にそれが散つている所とか。まあ、違う所もあるにはあるけど似ている。』

と言つてシユトリルはすーつと伊勢の背中から手を離す。伊勢は顔をしかめる。シユトリルはその様子をみてさらにこう語る。

シユトリル『ま、こうやってフォトンを直接流せる時点で似ているからな。別に腹痛とか頭痛ないだろ？』

伊勢『ええ、コレと言つて。』

シユトリル『なら確定だ。死神はある程度フォトンに対して耐性がある。それは死神が使う特殊なフォトンに原因があると思われる。』

伊勢はキョトンとしている。そして、フーと一息吐いてから。

伊勢『まず私たち死神はそれを霊子と呼んでいます。それとそれが京楽隊長とどう関係があるのですか。』

シユトリル『霊子か。もしその霊子がフォトンと似た物じゃなかったら、京楽さんは死んでた。いやゾンビと言った方が適切か。』

突然の発言に伊勢は驚き困惑する。そして、シユトリルは空中にタブレットを出す。それを見てまた伊勢は驚く。ピピッピピピッと言う音が静かに響いた後一枚の写真を見せる。

シユトリル『これがその比較写真。竜族って言うまた別のエネミーだけでもこれが最大の特長。』

と言つてシユトリルはそのエネミーの頭から生えている丸いたんこぶみたいなのを指す。

伊勢『こ、これは！』

シユトリル『その様子だと知ってるみたいだな。』

伊勢『…はい。最近の嘘によくついている物に非常に似ています。』

その頃の地球の一護の部屋。そこにて異常が起きていた。

コン『一護……』

一護『な、何だよこん。』

コン『おい、一護!!』

しかし、一護は無視をする。

コン『いちーごー!!』

コンを見ない理由は簡単である。そして、一護はパッとコンを見る。

一護『……く、むふふふ。』

一護はコンを見るなり笑みがこぼれ、耐えきれず声が吹き出る。コンは耳の横から一輪の花が咲いている。それがコンの体とアンバランスで非常に可笑しく一護には笑いの壺に入ってしまったのだ。

コン『オメエ!!また笑ったな。』

一護はそっぽを向く。出来るだけコンを見ないようにでも気になるのか目だけでコンを見ようとする。

一護『(なんで、なんであいつあんな物つけてんだよ。わ…笑いが……止まらねえ)』

何だかんだで一護達は平和に過ごしていた。

ある危機に気付かぬまま。

??? 『あやつから強い気配を感じる。だが私の体はまだ不十分。もう少し、もう少し待てば我はあやつと良い死闘が出来るであろう。待っていろ死神代行。待っていろ黒崎一護。』

黒いもやはそう語る。

5話

数日前からこの街はちよつとした噂がある。夜な夜な一人で出歩くと黒い大型の蜘蛛か赤い筋が体に入っている大型の蜘蛛に出会えると。

いい感じの半月が空高く浮かんでいる今日この頃、一護達はそれとは別の事件の調査に出っていた。そして今、目の前に噂の蜘蛛らしき生物がいる。

??? 『ねえ…一護?』

一護 『な、なんだよりりん。』

明るい青いパーカーを被ったひよこの人形ことりりと死神代行こと黒崎一護は話している。しかし二人とも冷や汗ダラダラで話し声もどかかぼそく、りりんは一護の頭の上で寝そべっているようだが二人とも動けないでいた。

りりん 『言い事ゆつくり、ゆくり下がるのよ。忍び足でね、シ・ノ・ビ・ア・シ。』
イチゴはゴクリとどこかきこちなく頷き、口の中の唾をゴクンと飲み込み、りりんに言われたとおりゆつくりと下がっていた。因みに今一護達の目の前にはダーク・ラグネと言うダーカーの一種である、全長7、8メートル高さは5メートルはあるのではないかと思われるそる巨大。と言うか蜘蛛と言うよりも蟻に近い生き物の形に見える

るがでかい、とにかくデカイ。また、この街の噂になっている蜘蛛はダガンの事であり、このダーク・ラグネの事ではない。

ゆつくりと一護達はその場を立ち去ろうとしていた。この時一護達はダーク・ラグネのちようど左後ろ足の後ろにいたこともあってこのまま行けば何事もなく、ゆつくりと右前足、左前足と歩いてきたダーク・ラグネにも気付かれる事も無く無事に帰還出来ていたが。

ピキッ

と、一護が木の枝を踏んでしまい、それが折れてしまった音が響いてしまう。そしてピクツとダーク・ラグネの動きが止まる。

りりん『ちよつと！何かやつてるのよ。』

りりんは声を抑えながらも一護の頭の上でジタバタ暴れる。そして頭をスササと移動して一護の肩に来て服を掴みそこでもまた暴れる。そしてついついりりに目線がいつてしまう。

一護『おい、暴れるな。落ちつけ。ま、まだバレたとは限らないだろ。おい、りりん？』

すると突然りりんが暴れるのをやめる。顔は道と平行に、つい正面を不本意に見てしまった。逆に一護はりりんを見ていて前を見ていない。

プルプルと震えだし、その顔は青くなっているりりん。声を出すがその声も震える。りりん『あ：あ、いいいい、一護』

一護『どうした。』

すると少し暖かく湿った風と共に『シャー』と割と小さな声でだがはつきりと聞こえるその声は、どこか怒っているようだ。

そして一護はまるでロボットのようにかくかくと首を回し目の前の怪物ことダーク・ラグネと面と向き合う。目と目が合う瞬間好ききだとryみたいな歌が流れて実際に見つめ合っている巨大な昆虫みたいなのと黒服喪服のオレンジ高校生。ダーク・ラグネは首を頭をグワーとあげる。

ダークラグネ『グアジャシャ〜!!!』

まるでつきに向かって吠える狼のごとく背中を仰げ反らし天高く吠えた。その距離わずか10センチ有るか無いか、その光景を見た一護達は。

りりん and 一護『あ：あ：ああああああつ!!!』

死神代行と人形の叫び声がよるに響く。そして走る、りりんを乗せた一護は猛ダッシュで走る。ただしひたすら真つ直ぐ。

りりん『いゝやゝゝゝゝ〜!』

涙を流しながら振り落とされぬよう必死に一護に捕まるりりん。風になびかれそ

の涙は走る一護には付かず、その後方に落ちる。

一護『ハーツハーツハーツ。可笑しいだろ、あれって… あれ?… ん、あくく!!!』
ふと後ろを見た、ダーク・ラグネがいらない、足を止める、気配を感じ上を見る、ダーク・ラグネ発見なお飛んで着地地点（現在の一護がいる場所）、とまあこんな感じの始末である。

一護と目と目が合ったあの場所から飛んでジャンプしてダーク・ラグネは一護たちを踏もうとしつつ着地する。

しかし持ち前の身体能力でそれを回避しつつ、自分の斬魂刀手をかけてそのどでかい日本刀を目の前の敵に向け臨戦態勢をとる。ダーク・ラグネによる家などの破壊は見られず器用に家の路地や道を上手いこと使って、どこにもぶつかることなくダークラグネは一護をみる。

怪物と死神代行が向き合う。するとりりんが

りりん『一護、あんた目的忘れてないわよね?』

一護『ああ。でも目の前のデカ物をやつつけてからだ。離れてな、りりん』

りりんがひよこんと一護から離れる。すると一護が霊圧を高める。青白い光の柱がゆらゆらと揺れ、次第に大きく激しくなっていく。それを見たダーク・ラグネは再びあの雄叫びを上げる。

先に動いたのはダーク・ラグネであった。体全体を降り、黒いフリスビーのような厚さが無いが鋭く危険な円一護に迫る。二度ブンブンと降り一回目に2つ、二回目に3つのあの円を飛ばす。とは言え一回目の時は一護のすぐ脇を通る物で退路を塞ぐ物であり、二回目の時に確実に当てて仕留めようと打ったものだ。

対して一護は一回目のダーク・ラグネの攻撃はあたらないためなのか何もしなかった。が、その一回目の攻撃が後方に行つたとたん飛び出す。正確には一度だけ地面をけつて、その勢いに身をまかせたまま刀を構え突つ込むと言う物である。ダーク・ラグネが放つた二回目は一護に確かに当たるが身に纏つた霊圧のおかげか、その円はお皿が碎ける見たいに割れて散り散りになってしまふ。それを見たダーク・ラグネは一護に向かつて咆える。

一護『はっ!!』

一護は大きく振りかぶり刀を振る。青白く輝く大きな斬撃がダーク・ラグネを襲う。しかしダーク・ラグネはそれにあたる前に大きくジャンプをしてその斬撃を飛び越えると同時に一護から距離をとろうとする。

りりん『飛、飛んだ!? あんな凶体して一護の攻撃にも反応してるし、つてあれ? 一護は。』

ふと素に戻るりりん。そしてダーク・ラグネは自分よりも高い位置にいる一護に気付

く。ダーク・ラグネは驚いたのか目を大きく見開く、そして。

一護『こつちが本命だ。月牙っ！天衝!!』

先程とは比較にならない大きく強い斬撃がダーク・ラグネの体を包み込み。空に大きな煙でできた雲もどきが一つ生まれた。そして、吹き飛ぶのはダーク・ラグネ2、3回回転しながら落ちていきダーク・ラグネが着地地点にしようとしていた路地よりも後方にある大きな川に着水するが、動かず6本の足は丸で大の字見たく大きく開いて上から見ると*のような形にも見えなくはない格好でいる。

りりん『一護く？やつつけたの？』

河川敷に突っ立っている一護の後ろからりりんが話しかけてくる。

一護『多分な。嘘なら現世から消えるはずだけど、胸に穴が空いてない事や霊圧が感じられないしこいつは嘘じゃない。』

りりん『ふーん。：。！一護、来たわよ。』

それを聞いて一護は『本当か！どこに』と驚いた顔をしつつキョロキョロと見回す。

りりん『うーうーん？この感じからするに：。上？』

一護『上？』

りりんが空を見上げ、一護も空を見る、その目はどこか強い意志を持っているように見える。

一護『夜一さん……。』

話は戻る。3日前、コンにあの赤いお饅頭みたいなのができてしまったあの昼の後の放課後すぎ、夕日も沈みそうな午後四時すぎ、季節は冬の始まりを告げるように風が肌寒い。

場所は浦原商店の部屋の中。丸いちやぶ台にすみには戸棚のような物があり昭和臭い畳や電話、カレンダー、とどこか古く懐かしい部屋。その部屋のちやぶ台にポンというコン。ここには一護、浦原、阿散井、茶渡、石田、ルキア、それと人形であるコン、りりん、蔵人、のぼがいる。

浦原『うーん……。恋次さん』

阿散井『何ですか浦原さん？』

浦原『コレなんだか分かりますか？』

浦原自身も知らないのか、六番隊副隊長阿散井恋次に尋ねる。阿散井うなりながら考えて話す。

阿散井『あの蜘蛛もどきが付けていたものに似ているような……。似てないよう、な？』

りりん『何よそのあいまいな答えは、しつかりしなさい居候!』

その不拔けた答えにりりんが阿散井のことを馬鹿にしつつ話す。すると蔵人も。

蔵人『いやはや、さすが恋次さん。ぶれないですね。悪い意味でも、イヤハハハハ。

あつのばはどう思います?』

ウサギのような耳を動かしてのばのことを指しながら話をふる。因みにこの振つてるほうも降られてるほうも人形である。

のば『いや、俺は実物すら見るのもこれが初めてだ。』

タキシードを着た亀のような人形であるのばは答える。隣に來たりりんがどこか誇らしげにのばに話しかける。

りりん『恋次については?』

のば『…問題ない。うん、問題ない。』

阿散井『お前らな…(怒)』

少しの空白の後、のばは答える。きつと何かを察してしまったのだろう。そしてキリキリと阿散井の手から音が出る。その手はプルプルと震えているが手はまだあげてない。

茶渡『なんで、二回も言ったんだ』

石田『それよりも今はそのタンコブ、どうにかすべきじゃないのかい。』

茶渡が不思議そうな顔をして突っ込む、どこか不安そうな顔をしていると思われる。顔に余り変化が無いためだろう。そんな阿散井の話はどうでもいいからと言わんばかりに話を戻す。少しいらついているのか。少し声に張りがある。

ルキア『コン。本当にいつできたのかわからないのか。』

一護『昼休みよ、近くに出て来た嘘を倒しに行った時は何ともなかったが。』

コン『おい一護！何でテメエが答えているんだ!!ねーさんは俺に聞いてきたんだぞ。まったく。』

りりん『じゃあ、倒した後にそのタンコブは出来たの?』

一護『ああ、多分な。』

蔵人『それじゃあそれはその嘘が産み付けた卵みたいな物じゃないんですか。死ぬ前に攻めて一撃、みたいなの?』

浦原『それは無いと思いますよ。』

ルキア『これから嘘の感じがしないからだ。』

阿散井『まあ、確かに嘘の感じがじやないな。強いて言うなら石田がバウントになったときの真逆……か?』

一撃『石田の真逆?霊圧がか?』

石田『キミは本当に死神代行に戻ったのか疑わしいよ。』

りりん『靈圧の質よ、質。死神とクインシー、それに靈圧にも個性みたいのがあるから誰がどの靈圧の持ち主かが分かるんじゃない。ていうかあんたらバウントの靈圧探れないでしょうに』

そんなこんなで話しつつ、誰かが突っ込んだりしながらガラガラと。

ジン太『帰ったぞ、居候お茶くれ。』

ウルル『ただいま。』

鉄裁『帰りましたぞ、つておやこれはこれは。』

阿散井『自分でやれ、自分で。』

浦原『お帰りなさいッス。でっどうでしたか。』

そんなやり取りが行われたのち、浦原が鋭く真面目の目つきで話す。帰って来たジン太とウルルは目をそらしうつつむき、鉄裁だけはブンブンと首を振った。

浦原『… そーっすか。』

深く帽子をかぶる浦原、そしてそのやり取りを見て不思議に思う一護達数人。すると阿散井が口を開く。

阿散井『話したらどうっす、浦原さん。』

一護『何か問題でも起きたのか？浦原さん。』

浦原『…』

浦原のうなり声のような声になった後。茶渡がふとつぶやく。

茶渡『そう言えば夜一さんは？』

ジン太『そ、そんなことより居候お茶。』

ジン太は何かを察したのか。阿散井こと居候に飲み物を要求する、きつと話題をそらそうとしているのであろう。ジン太の顔はどこか引きずっている。無理やりの笑顔という感じだ。

浦原『もういいですよジン太。二人は上にも行つてなさい。鉄裁さん、あれを持ってきてくれませんか？』

鉄裁『…わかりました、店長。』

ルキア『夜一殿の身に何かあったのか口を？』

一護『浦原さん!!』

ルキアは阿散井にと一護は浦原に話を聞こうとする。一護は机を叩いく、コンやお菓子やお茶が揺れる。ルキアに少し注意される。茶渡や石田も真剣に聞こうとしているのか、どこか不安そうな感じもしつつ真面目な姿勢だ。

浦原『落ち着いてください。そんなに詰め寄られても困りますよ、一護さん。』

鉄裁『お持ちしました。』

すると鉄裁がスマホのような物を持つてくる、全部三つだ。大きな画面に片手で握つ

て操作できそうな感じのタッチパネル式のリモコンにも見えなくはない。上の差込口の所はなくそこに1センチ満たない薄く赤透明の丸いものが刺さっている。しかし一つだけその丸いものが無い。

石田『浦原さん、これはいつたい。。。』

浦原『GPS機能付き携帯電話と言えばいいすつかね。携帯電話としての機能はもちろんのこと、これで登録した相手の霊圧を元にどこにいるのかが1発で分かる優れものはずだったんすけどね。あ、この丸いは発信機の機能もあるっす。』

りりん『因みにその発信機が欠けているのは夜一さんのよ。』
一護『へえー。。。お、これがスイッチか。』

一護は興味津々にそれを取ると裏を見たり回して側面を見たりする。と、その側面に小さなボタンを見つけ推そうとする。

浦原『あくく!!!駄目ですよ一護さん。』

とそのスマホもどきを浦原は取り上げる。画面が暗いのを確認して『ふく』と息を吐いた。

一護『す、すまねえ浦原さん。な、なんか悪いとこしたみたいで。』

一護は不思議に謝るが、やはり好奇心があるのかチラチラとスマホもどきを見る。

浦原『話を進めますよ。実はここ数日ある噂が死神の間に流れてるのを知ってますか

？」

茶渡『ある噂？夜な夜な大きな蜘蛛が出るって言う奴ですか。』

茶渡が首を傾げつつ答えた。しかし石田がそれを否定する。

石田『いや、それはないだろう。というか僕はそれに関してでは実際に見ている。一護にルキアさんもだ。』

ルキア『ああ、確かにあの時茶渡はいなかったからな。と言うか一護、話してなかったのか？』

一護はルキアと目を合わせようとしなない。

ルキアの攻撃！拳で殴る。

効果抜群だ！

浦原『先程石田さんが言ったとおり、それとは別の噂ですよ。』

茶渡『そ、そうか。すまない』

浦原『いえいえ。で、死神の間に流れてる噂ですが。何でもバウントが現れたとか。もちろん私もこの子たちを使って調べてみたんですが、何とも微妙な結果でした。』

りりんたちに目を向けつつ話す浦原。その続きをりりんたちが話す。一護は頭を抱え、ちゃんと聞いているかどうか妖しいが。

りりん『確かに浦原さんにわからない何かの霊圧が感知出来たにはできたんだけ

も…。」

蔵人『それがバウントかと言われると大変、いや非常に微妙なんですよ。ホントですよ。』

のぼ『なんとさえいいか、例えるなら渋柿と普通の柿の食べ比べみたいな感じだ。』
ルキア『見た目では、いやこの場合は霊圧的に区別しづらいと言うことか?』

りりん『うーん。そう言うわけじゃ、いやそう言う事か?』

浦原『まあ、そいつらを仮にバウントもどきとしましょう。この重要性はそのバウントもどきが何なのかと言うことでは無く。そいつらに夜一さんがさらわれた可能性が非常に高いということです。』

その一言に阿散井や浦原一家を除き皆驚き、顔が固まる。一護が冷や汗をかきながら『嘘だろ』と一言につぶやいたりしていた。そして阿散井が話を付け足す。

阿散井『それだけじゃねえ。八番隊二番隊に多数の行方不明が出ている。その中には二番隊長の碎蜂隊長と八番隊長京楽隊長と副隊長の伊勢副隊長も含まれ、八番隊にいたっては隊員の4割が何処かへ消えちゃった。』

ルキア『な?!馬鹿な!!隊長格二人が行方不明?!それだけでも有り得ないと言うのに隊員の4割が行方不明だと、何かの誤報ではないのか。』

一護、茶渡、石田の3人は言葉を失っている。阿散井はルキアを見つめる、その目は

とてもうそを付いているように見え、事の大きさを物語っている。石田が我に返ったのか、眼鏡を指でクイツと動かし話す。

石田『それが事実だとしたら夜一さんを含めた3人の隊長クラスが僕たちが学校へ行っている間にやられたという事だぞ。しかも敵が何者なのか、どういった目的なのか、戦力すら不明、そんな奴らに勝てるのか』

阿散井『残っていた隊員の話だと4人組の銃使いや鬼道の使い手にやられたとか。白い大きな馬や腕が多数ある化け物、銀色の魚みたいな化け物にやられたとか。訳の分からん答が多すぎる。』

茶渡『ん？化け物を操る敵ってまさか』

阿散井『ああ、俺も最初はバウントの生き残りがこの事件の原因だと思ってここに来たからな。だけど聞くところによるとどうもそんな単純な話じゃないらしい、現世にここ最近現れる蜘蛛とかよく分からん生物もすべてバウントが従えるものかと思っていたがこいつらがバウントとじゃねえとか言ってるし、こつちだつてんでこ舞いだ。』

浦原『しかもこれ、まだ作つてから間もない代物なんです。：。進入、より分かりやすく言うならハッキングされたんですよ。だからコレの電源を付けないで欲しいつすよね。私がちまちまと勉強して練り上げ作り出したと言うのにまさか売り込む前に誰かにハッキングされたんですよ。しかもあの小さな発信機で、危うく瀕霊廷内のデータ

ベースまでたどり着こうとしていましたからね。まあなんとかなったから良かったんですが、相当な技術力も持っていると考えて良いっすね。』

コン『おい、オレ様の話じやなかったのかよ。話それまくりじゃねーか。』

しみみりとチクチクするような雰囲気の中、コンが自分のことからどんどんそれていく話題にたいきれず怒鳴りだした。するとコンをふとみた浦原が突然笑いだし一護へと話しかける。

浦原『コンさんそれはいくらなんでもないっすよ。…ふーっ、一護さん。コンのこれをどうにかしましょう。』

するとあら不思議、コンの頭に、正確には耳から一輪の少し黄ばんだ白い大きな花が咲いていた。

するとどうだろうか、先程の空気が嘘のように吹き飛ぶ。皆が笑顔になった、一人を除き。皆が何かのスキツリした表情になった、一人を除き。

浦原『一護さん。これをどうにかしますので、ちよつと頼まれてくれませんか。』

笑いすぎたのか浦原の目には少し涙が貯まっていた。笑いすぎてむせたときにも貯まったものだろう。一護はいい笑顔で『いいぜ!』と答える。すると石田が『僕も手伝うよ。』と答える。続いて茶渡『俺にも手伝わせてくれ。』と言う。

ルキア『貴様が死神として再び活躍できるまで護衛せねばなるまい、そのついでとし

て手をかしてやろう。な、何だその目は。』

ルキアは死神として再び活躍できるまで一護のお目付役兼護衛をしている。そしてそのルキアの目を見る一護。

一護『いや、みんなありがとな。』

浦原『承諾してくれた、てことでいいすね。一護さん。まあ、頼む内容は後日ですが、今の一護さんに無理はさせませんよ。とりあえず今日は解散って事で。』

一護『昔から夜一にも世話になつてるかな。…ん？』

彼と彼が接触する日も遠くは無いだろう。しかし窓の遠く向こうから除く黒い彼、彼に目を付けられてしまった事をこの時一護は知らなかった。

コン『何で皆笑つてるのか俺には理解出来ないんだけど…』

りりん『鏡を見てくれば分かるんじゃない。』

蔵人『ですね。ここは教えないであげましょう。ねーのば。』

のば『そんなに心配するなコン。時期分かるはずだ、問題ない。』

そんな事を話したなと思ひ出す死神代行黒崎一護。彼は仲間を救うために刀を振る。

恩返しのもりなのかも知れないが自分が成長した姿を見せたかったのかも知れない。ダーク・ラグネも再び動き出す。しかし一護に敵意が無いのを確認すると上からくる何かに威嚇するようにグルルルとうなり声を上げる。空の上から近づく何か、一護はまだ見えない脅威に神経をとがらせていた。

ルキア『大丈夫か一護。』

後方上空からフラツと現れるルキア。スタツと着地をして一護に声をかけている。

りりん『ルキアも来たのね。向こうは大丈夫なの？』

ルキア『誘導作成か……。11番隊から班目副隊長と綾瀬川3席。5番隊からは協力者はえられなかったら。だが、10番隊副隊長隊長が来てくれるように取りはからってくれたとか。』

一護『冬獅郎がか？それに乱菊さんまで、何で。』

ルキア『茶渡が井上にこの前のこと連絡したら泊めていた二人にも聞かれたらしい。と言うことか一護、なぜあのかい蜘蛛……。いや蟻か、いやそうじゃなくてそんなのと戦っておったのだ。あれでは気付かれるであろう。走って巻いてしまえば良いものを。』

一護『いやなんかさ、男の目をしてたから、その……。つい。それに戦って欲しそうな目をしてたから……。か？』

りりん『でもそのちよつとした騒ぎのおかげかも知らないけど、来るわよ。』

すると対岸の橋の下、一護達から離れてほしい100メートル。そこから青白い光と共に一人の男性が現れたのが見えた。その瞬間ダーク・ラグネはそそくさと赤く黒く丸いワープゲートのようなものを通ってどこかえと行ってしまふ。その時一護はそのダーク・ラグネと目があつたような気がした。

6話

時間は少しさかのぼる。

シュトリル達の拠点は山の穴蔵からこの小さな宇宙船に変わりつつあった。といってもあの穴蔵の方が広々としていたが外の風が流れ込んできたりすぐ近くまで誰かが寄ってきたりなどと生活の拠点としてはダメダメであった。さらに最近死神と呼ばれるものが活発化してきた事と怪我人の看病もあるので『拠点はアークスシップにしよう』となった。

そして現在、シュトリルはフォトンによって人になったのかも知れない猫とキャツス姉弟と共にいる。姉弟とこの猫は昼から夕方の間この猫の飼い主を探していた。

理由は簡単、この猫に発信機らしきものがあつたのと傷を治療した後があつたので誰かこの猫との知り合いがいるとシュトリル達は考えている。そしてその飼い主との繋がりを元にこの地球へと根を改めて下ろしたいと思っている。

そんなこんなでこの猫の飼い主がいたのかどうかなどの会議を今行っている。そんなに堅苦しいものではないが。

シュトリル『で、どうでした。身に覚えがある場所ありましたか？』

猫『ダメじゃった。わしがどこから来たのかも何者なのかもまつくたく思い出せん。』
ナーコヤ『記憶喪失の改善傾向は未だにありませんよ。どうしたら』

この猫、夜一である。しかし記憶喪失を起こしているため、昔のことは自分の名前や暮らしていた場所も含め全て忘れてしまっている。そのためここでは夜一のことこの猫はシュトリル達に黒と呼ばれている、恐らく毛が黒ことから来ているのだろう。

リュシ『それをこれから考えるための会議でしょう。案としてはもう一度あの機械を調べてみたらどうですか？ 逆探知するみたいに来る出来ないですかね。』

シュトリル『それはもうマキナが試したけどバレたみたいでもう通信すら出来ない。そこから得た情報を元に調べようとしたんだけどその情報の欠損が酷すぎて無理だね。情報ログを見ようとしたんだがもともとオンライン専用みたいだからこっちからも無理っぽい』

この猫がマキナの手によって浄化した後怪我をしましてま京楽や伊勢をここアークスシップに連れ帰ってきた。その後、京楽や伊勢の様態が落ち着いてある程度安全になった。更にその後、マキナが猫だった女性の体を調べている時、赤い小さな球体を見つけた物を見つけたのだ。シュトリルがフォトンでその赤い球体がなんなのかを調べ発信機だというのは分かったのだ。がそれがどこから電波らしき物が出ているのかを調べていた時、突然熱暴走みたいなのを起こし壊れてしまったのだ。

リユシ『黒ちゃんどうしましょうか、ねー♪』

夜一『そんな名前じゃったかな。』

シユトリル『せめて名前さえ分かればなんとかなると思うのだが』

『ハア』と言う2つのため息が部屋に響く。この部屋は本来装備をそろえたり、回復アイテムを買ったり、出撃したりと戦闘準備等をするところなのだがここで4人はだべっていた。

ナーコヤ『破損したデータって復元できないの、師匠？』

シユトリル『無理だ。個人が持つ端末にも出来る限界があるし、マザーシップの俺の部屋のネットワークに繋がればいけなくもないがそれが出来ないからな。』

夜一『もしかして猫だから分からないのかの？』

夜一はそう定案する。しかし、リユシやナーコヤは今ひとつわからないという感じになっっている。

リユシ『と言うと？』

夜一『目線の違いとでも言えばええかのう。ほら猫と人の目線とかそう言うのって違いがあるから、それで分からないのかと思っただのじゃが。』

それを聞いたシユトリルはうーんと考えながら話す。

シユトリル『目線の違いか……』

(目線ね目線……。確かに猫と人じゃあ色々違うと思うけどそれはこの黒ちゃんが猫も人も両方なれるからこそかな。しかし、それを理解してるのは黒ちゃん自身で俺らにはそう言う違いって奴は分からないと思うのだが。うーんこう言う時は年配に聞くのが良さそうなんだけど今いる年配って京楽さんしか。)

あつ!』

夜一『どうしたシュトリル殿。』

シュトリル『ちようど保護している死神がいるからそいつに聞いてみたらどうだ? 少しはここに土地勘あるみたいだしもしかしたら黒ちゃんの事分かるんじゃないか。』

ナーコヤ『あ、伊勢さん達にとって事ですか。』

ナーコヤは笑顔ではなす。リュシは何か納得したような夜一はいまいちわからないという感じだ。

するとマキナと伊勢七尾がこの部屋に入ってきた。

マキナ『マスター、ふたりの今日の治療を終えました。伊勢さんの方はもう大丈夫ですが。やはり京楽さんの方はまだまだまだ時間がかかると思われます。因みに伊勢はリハビリを兼ねてこの船の案内をしています。と言って三部屋しか無いんですけどね。』

伊勢『ご迷惑をおかけしました。』

伊勢が頭を下げると、皆笑顔だったり安心した表情を見せる。シュトリルが軽く話

す。

シユトリル『気にするな、人生こんなことだらけだし、アークスはこう言うのもやる決まりだから。』

夜一『噂をすればなんとやらじゃな。』

マキナ『噂?』

マキナと伊勢は互いに不思議そうな顔をする。

場面は河川にいる一護達に移る。

ルキア『一護、作戦内容は頭に入っているな。』

一護『追っかけてあの公園の開けた場所に誘導すればいんだろ。』

リリン『浦原さんの調査によればあのモドキ達は広い場所でどこかに繋がる結界みたいなのを張って出入りしてるみたいなのよね。その結界を開かせた所をガツンと叩いてシユシユシユと捕まれるのよ。』

リリンが言うモドキ達はたびたび目撃情報が上がっている。死神に対して何かしらの敵意ありと伝わっている。しかし、問答無用で斬りかかるのはルキアは出来ず이었다。

ルキア『一護、お前はここで待っている。』

ルキアは一度接触を試みる。ルキアのほほ直感もあるが、話せば分かり合える可能性が少なからずあるからだ。

一護『おい、大丈夫なのかよ。』

ルキア『私もただただ時間を無意味に過ごしてきたわけではないのだぞ。』

りりん『頑張ってルキア〜。』

河川にかかる橋の下、そこにいるのはバイクのヘルメットのようなものを被っている一人の人。色はシルバーで普通のヘルメットのと見た目は変わらない。服装は全体的に暗めな配色で上のジャケットにいったつては迷彩模様で下は黒のジーンズで服が多少傷つきそこから白くほつれている事がわかる。この姿は他の死神からも目撃情報が出ている。バウントモドキで情報があがっている人物でもあるが、どんな手段を使っているかの情報は入ってこなかった。

そんな得体の知れない奴にルキアは近づく。体や服装の感じからして男であると思われる。

ルキア『貴様、ここで何をしている。』

???『!!:.:.』

ルキアは刀を抜いてはないがいざという時のために刀に手をかけ、いつでも抜いて戦えるように構える。腰を低く落とし、目の前の男を警戒している事が分かる。向こうもルキアの事を警戒している。

ルキア『:.:. (こいつがああホロウモドキを操っている親玉なのか。)

貴様には、二番隊長並びに八番隊長副隊長への誘拐及び殺人未遂の容疑がかかっている。手配書もある、容疑を否認するならまずは顔を見せる事だな。』

ルキアは慎重に言葉を選びつつ話す。手配書を見せて顔には出さないが威嚇しているようにも見える。

???『一つ聞く、その手配書の顔は京楽春水本人又は伊勢七尾本人からちゃんと確認を取り、しっかりと聞いた物か。』

ちゃんとやしつかりと等と言った言葉を強調しながら話す男にルキアは不思議思った。

ルキア『:.:. その質問に一体何の意味がある。』

???『いいから答えろ。お前さんには意味がなくても俺らには重要な事柄だ。』

ルキア『どうする。正直に答えるべきなのか。しかし、正直に答えた所で私にメリッ

トはないがそうおめおめと話して良い物か。：。私自身直接聞いてみた訳では無いが四番隊や六番隊の聞き取り調査では確かにそう言っていたらしい、ただ浮竹隊長は少し妙な感じだったか。：。というかこやつ、俺ではなく俺らと言っていないかったか。：。ならば執る手段は)

ならば説得して見せろ。その重要な事柄と言う奴で。』

男は手をあごに当て考えているのか、しばらくうつむく。すると男は突然、上を向きこう話し始める。

??? 『済まない、どうやら時間切れらしい。』

ルキア 『時間切れ?』

そして男は回れ右をすると姿が透けてが見えなくなってしまう。透けて行く最中ルキアから遠ざけるように歩いて行ったのが理解できた。

ルキア 『な!? まで』

一護 『ルキア、大丈夫か。』

りりん 『ちよつと、待ってろってルキアに言われたでしょう』

ルキアの事がやはり気になってしまった一護が我慢できずに駆けつける。りりんがポカポカと一護を叩いているが、一護に『おい、やめろりんと』言いつつルキアが見つめていた方角を見る。

ルキア『おい一護、どうやら貴様が近づいてきたおかげで私はせっかくのチャンスを取り逃がしたのだぞ。』

プルプルとルキアの拳が震える。一護は引きつった顔をしつつ、ルキアに冷静になって貰おうと試行錯誤する。

一護『え!?俺のせいなのか、あ、いやとりあえず落ち着いてくれルキア。』

りりん『あーあ、私の霊圧にも引つかからないからもうどつか遠くに行っちゃたんじゃない』

ルキアはさつきまで訳の分からない男がいた場所をピシッと指し一護に怒鳴る。

ルキア『せっかく奴が見つかつていよいよ作戦開始と言うときに、しかも和解のチャンスをぬけぬけと貴様は何という事をしてくれたのだ、このたわけが!!』

一護『しようがないだろ!!だいたい、お前が霊圧を乱しているからわざわざ心配してこっちは駆けつけたのに、その言い方は無いだろう…。に?』

一護はルキアが刺していた方角を見つめた。すると一護はこんなことを言い始めた。

一護『そこにいるのが、今回のターゲットじゃねえのか?』

ルキア『何を言う、奴はもう消えてどこかえ行ってしまったのだぞ。あの独特の霊圧も感じない』

ピクツと男の足が止まる。すると男は河川の川の水の上を走る。かなりのスピード

で水面を走り始める。それによって当然のごとく川に不自然な水柱がたち、バジャンバシヤンと音が出る。

りりん『一護、何あれ。』

ルキア『何だ、川に突然!』

りりんやルキアには見えていないのか、一護は戸惑う。

一護『お前ら、あれが見えねーのか?』

りりん『な、何のことよ。』

一護にはバイクヘルメットをかぶった男がこちらに気付いて逃げているようにも見えなかった。

一護は『くそ!!』と声を上げ、男に近づく。

一護『とまれ、いきなり逃げるとはどう言うつもりだ。』

一護の方が速かったのか謎のヘルメット男が対岸につく前に一護がいた。一護はヘルメット男の顔の方角的に自分を見ていると気付く。

一護『あんた、一体なにもんだ。死神かホロウかそれともバウントなのか。答えろ。』

一護は冷静に淡々と斬月を構え、落ち着いて話す。目を離さないようになるべく顔を見る。しかし、不意にカプセルが目の前に現れた。一護がそれをちゃんと視界のピントを合わせて認識した頃にそれは閃光とともに弾けた。防御行動は出来ずそれをもろに

受ける。

一護『ぐあ!?!… くつ、何をしやがった、テメエ!!』

たまらず膝をつき、目を閉じる一護。斬月を杖代わりに何とか立とうとする。目も無理矢理開けるが赤く充血した目がしつかりとあのヘルメット男を捕らえることは出来なかつた。が、白く霞む視界ではあつたがヘルメット男がそこにいると言う物は掴むことが出来た。そのため次に一護が行つた行動は。

???『死神代行か… ん?』

一護『月牙』

ヘルメット男が発した言葉など今の一護は気にもしなかつた。むしろ敵を一時的には言え戦闘不可能の判断したこのヘルメット男は油断していた。そして突如高まつていく一護の霊圧に反応が遅れてしまう。

???『な!?!』

一護『天衝!!』

轟音と共に放たれたその技の衝撃で高さは10層にもなる青白い柱がそのすごさを物語っていた。

それはそれぞれの場所のそれぞれにも伝わっていった。

公園の中。

松本『隊長、いまのつて。』

日番谷『ああ、間違いねえな。黒崎の霊圧だ。』

商店街の上空

綾瀬川『一角、今のつて。』

斑目『黒崎のやろう、俺らを誘つときながら自分が最初とは。へ、いい度胸してんじゃねえか。』

暗い山の中

平子『なんや、向こうも始めたみたいやな。』

雛森『あの平子隊長、私達は行かなくていいのですか？』

平子『阿呆！本来の任務を忘れたらアカンで、またひよ里達にどやされるのは嫌やしな。それにワイらに出来るのはあのホロウ擬きに邪魔されないようにしてやれるぐらいや』

雛森『は、はあく。て、また出てきた!!』

その頃また別で活動しているのも達がいた。

暗い夜の住宅街。

リユシ『：： 大丈夫かな？』

ナーコヤ『師匠なら、大丈夫だよ。それより速く行こうよ。あの人強いから。』

夜一『今の霊圧、どこかで：：。』

どこかへ向かう子供二人と猫一匹。彼らは彼らはの特殊任務を行っている。それが吉と出るか凶と出るかは、まだ分からない。

7話

あナーコヤ『ここが？』

リユシ『発信機の出所？』

マキナ『恐らくそうだと思います。マスターは戦闘中。あなたたちふたりは戦うのではなく交流ですよ交流。』

夜一『わしは人質か。まあ、世話になったからの。』

マキナ『すいません。作戦がこれしか思いつかなくて。記憶探つてやつと分かったの
で。』

夜一『よいよい。わしも完全に思い出してないからの。お互い様じゃ』

ナーコヤ『えーと…行く？』

浦原商店の中では緊迫した空気が流れていた。

鉄裁『…どうしますか店長？』

浦原『うーん…。あれ夜一さんですよね？』

ジン太『でもあいつら子供だぜ？俺と雨で。』

鉄裁『いけません。子供だからと舐めていると痛い目みますよ。』

鉄裁はジン太を叱りつける。ジン太はしゅんと落ち込む。しかし雨はジン太の服の袖を掴む。その手が震え涙を溜めてる雨の目をジン太が見る。

ジン太『恐いのか雨?』

コクリとうなずく雨。それを見てジン太は覚悟を決める。

浦原『うーん。うーん。うーん。どうしましょうか?』

鉄裁『相手の目的が分かりません。』

ジン太『案外飼猫だと思つて返しに來ただけなんて。』

浦原『それは薄いかと。そうですね。』

鉄裁『ん、ひらめきましたぞ!店の裏に物を取りに行くふりして出方をうかがうのは。』

浦原『あ、なるほど。それならジン太にも出来ますね。』

ジン太『まじ?』

雨『異議無し。』

ジン太『嘘だろ。』

ジン太はハアと息を漏らしつつ指示に従うのであつた。

鉄裁『それでは我々は待機して。』

すると浦原は大声で高らかに明るく元気な声で。

浦原『ジン太く!!頼みましたよ!!』

その声はリュシ達にも聞こえた。

リュシ『ん?』

ジン太『うっせー。止めろバカ。』

ジン太が小声で吠える。

ナーコヤ『あ!ちよつとそこの君君。』

ジン太『(ぎ、早速来たー!?!?)』

お、お前らなんだよ?』

リュシ『え?この子を返しに来たの。他にも有るけど。』

夜一『よ!』

ジン太は固まる。この状況どうしろと。

ジン太『…他って?』

ナーコヤ『なんか…その…ごめん。』

ジン太『いや、謝られても。』

リュシ『とりあえずここの責任者に会わせてくれない?』

ジン太『…要件は?』

リュシ『この猫ちゃんについて。』

黒猫事夜一は静かに待っていた。ジン太は後ろをチラリとみて答える。

ジン太『そこで待ってな、外に取りに来たものがあるから』

マキナ『あー、あー。聞こえます？お二人もと。マスターの方が戦闘に入られました。なので予定通り私もそちらにうかがいます。大丈夫ですか？』

マキナからの通信だ。

夜一『ほれ、行くぞ。』

猫は人型になっていた。因みに猫は服を着てなかった。つまり人型になっても。

ジン太『ブフツ！いっつもそれ止めろって』

ナーコヤ『いっつも？』

リユシ『ビンゴだね。』

ジン太は鼻血を流しているが、それをスルーして店の中に入る。

ナーコヤ『お邪魔します。』

ジン太『お、おい！』

リユシ『さてはて鬼が出るか蛇が出るか。』

マキナ『通信入れといてくださいよ。』

ナーコヤ『分かってますよ。夜一さん、見覚えありますか？』

夜一『うーん、なんとなくかの。』

ナーコヤ『なんとなく。』

店の中を歩いていく。するとガラガラと居間の扉が開く。

鉄裁『どうぞこちらへ。』

リユシ『ありがとうございます。』

鉄裁は三人を出迎え丸いちやぶ台挟んだ向こう側に浦原がいた。

浦原の姿を見た夜一。すると突然頭痛がしだす。

夜一『っ!!』

ナーコヤ『夜一さん!?!? 大丈夫?』

浦原『夜一さん!!』

鉄裁『頭痛薬をお出します。』

リユシ『… 記憶喪失だよ。この夜一って人は。』

ジン太『な!?!』

浦原『原因は』

浦原はにらむ

ナーコヤ『そんなに睨まないでくれよ。』

マキナ『それは話し合いに応じるって事でよろしいでしょうか。』

すると居間に突然円柱状の何かが出来る。ナーコヤやリユシはよく知っているが浦

原達は警戒する。

そしてその中から一人の女性が現れる。マキナだ。

マキナ『初めまして。シュトリルのサポートパートナーを勤めさせて頂いてるマキナです。いごお見知りおきを。』

空座町のとある公園付近。

リュシ達がちょうど浦原商店を訪れた頃、シュトリルは三人を相手にしていた。死神達は空中でシュトリルは地上で互いに相手していた。

松本『灰猫!!』

灰色のもや、正確には灰がシュトリルの後ろから回り込もうとする。しかしシュトリルはそれを見て下の灰が薄い所から抜ける。

日番谷『読めてんだよ!!』

それを読んで日番谷はシュトリルに追撃を放つ。が、シュトリルはバク宙をして交す。

ルキア『破道の33。赤火砲!!』

シュトリルの背中、少なくともルキアは当たったと思った。がしかし、シュトリルは

空中で側転のような動きをしてそれすらかわす。

そしてシュトリルがかわした赤火砲は日番谷に当たりそうになるが当たる直前で日番谷が切ったのだ。

松本『何なのあいつ!?!』

日番谷『松本! そいつから目を離すな。』

松本『はい、隊長。』

ルキア『大丈夫ですか。日番谷隊長。』

日番谷『なんともねえ。』

シュトリル『避けるだけなら楽だけど、攻めるとなるとなあ。双銃の射程距離に、ぬおっと!!』

灰がシュトリルの頭を包むように襲いかかるが後ろに下がってかわす。

松本『ちよっと!! 何で攻撃してこないのよ!!』

かれこれ1時間近くこれが続いている。先に疲れが見え始めたのはシュトリルことアークスではなく、日番谷達死神達だった。

シュトリル『うーん、やっぱり普通にならスタミナは俺の方が上なんだよな。けど攻撃をくれたと勝手に俺のスタミナ切れ…。単にフォトンが薄いだけかこれ?』

日番谷『氷輪丸!!』

氷の竜がシュトリル目がけ突っ込んでくる。

シュトリル『(…少しやってみるか。)』

日番谷『な!』

ドシユンとシュトリルの双銃が火を噴く。

たった一発の弾丸。銃口からの距離は1メートルもなかった。そしてその弾丸は日番谷の額に当たる。

シュトリル『(おや? 避けられないはずは無いけど。)』

ルキア『日番谷隊長!!』

後ろに少し引いた後、日番谷はシュトリルをにらみつけた。額からは血が出ている。

日番谷『ツ…大丈夫だ。』

(打ってきた。今頃やる気になったのか? それとも今の攻撃が奴に取って打って出るべき理由があったのか。)』

さすが隊長と言うべきか。日番谷はよりいっそう冷静になった。

シュトリルもまた今の事に疑問を抱いた。

シュトリル『(フォトンで傷を付けた? …高濃度で放てば確かに相手に傷や怪我をさせることが出来るがただレバーを引いただけだぞ。仮に今の攻撃が当たったとしても額に当たった瞬間銃弾の方が砕けてはず…またレア度を下げて対応すべきか? い

や、この前みたいに原因不明の気絶になるかも知れない。』

シュトリルが考え事をしてたその時。

日番谷『卍解。』

シュトリル『なっ!!』

日番谷『大紅蓮氷輪丸。』

シュトリル『卍解。確かさつきより5倍から10倍程度強くなる必殺技みたいな物だっけ。』

互い見合い、下手に動く事が出来ない。

日番谷『松本、ルキア。お前達はすぐ近くで待機してる斑目達と合流しろ。』

松本『隊長は。』

日番谷『俺はこいつをやる。』

シュトリル『(かけだがやってみるか。』

もしもこの前のがフォトンの枯渇ではなくフォトンの暴走による気絶なら。押さえ込むのではなくむしろ解放するのが今は得策!。』

シュトリルの体がわずかにだが光りだす。そして。

シュトリル『雷鳴響け。雷銃タケミコウガ。』

日番谷『な!』

シュトリルの体はわずかにビリビリと稲妻のようなものを纏っている。日番谷達はその変化を感じ取った。

日番谷『な、何だ。さっきまで奴の霊圧が感じ取れなかった。だが今はヒシヒシと伝わってくる。』

行け！二人とも早く。』

シュトリル『(インファイニティファイア)』

ドシユシユシユシユン！ドシユシユシユシユン！

氷の翼を盾にシュトリルの攻撃を防ぐ。

日番谷『本格的に撃ってきやがった。』

(クソ。射程は軌道よりは無いと思いたいが。この威力、下手に目でも当たれば致命傷じゃすまねえ。今の今までこっちの実力を測っていたのか？

舐めたまねしやがって!!)

』

松本『隊長!!』

日番谷『早く行け松本!!』

こうして会話してる間にも日番谷は撃たれていた。

だが氷の翼は多少かけたりする物の耐えていた。

ルキア『いきましよう。』

後ろを見せ背中を見せたルキア。その瞬間。

ドシュツン!!

ルキアが撃たれた。先程より強力で射程もかなり長い。

撃たれたルキアは衝撃で2〜3メートル程とばされ地面に落ちていく。

松本はそのルキアの落下を止めるために自然と体が動きルキアにかけよる。が

ドシュツン!!

今度は松本が撃たれた。

わずか数秒の出来事。松本もまた地面に落ちていく。

日番谷はシュトリルを見る。目の前で二人がやられた。自分が被弾しないために氷の翼で身を守り、視界から外した一瞬を、こちらが攻撃に移れない一瞬の内に二人をやった奴が目の前にいる。

日番谷『松本!!ルキア!!

(どうする!どうすればいい。あいつを倒すにはどうすればいい。)

『

冷静に怒っていた。日番谷はそんな状態だった。信頼している二人がやられた事に怒りを覚え、今にも目の前の奴を切り刻みたい。けして弱くない二人がやられた事で相

手を侮ってはいけない、冷静に状況を見て策を立てなければ。と言う二つの思いが混ざり合っていた。

が、ドシュツン！

まだ撃つてきた。日番谷は氷の翼で防ぐがその氷の翼は
バリン！

とはじけ飛ぶ。が、それは日番谷にとっては予想の範囲内。相手は一気に自分らを攻め落とす気じゃないかと考えていたからだ。時間稼ぎの必要な時間、もしくは実力を図るにもう必要何かをもう得たから速攻倒す、そのためには一人1発撃ってくる。そう考えた。

日番谷『ぬおーー!!』

日番谷は突っ込んだ。ある意味捨て身の特攻。しかし10メートル程度の距離、正解した日番谷なら1秒もあれば届く距離。

ドシュツン！

しかしまたあの強力な弾丸を放つ。そして
バリン！

日番谷は碎けた。全て氷の欠片になった。

シユトリル『(∵) あ、やらかした。ちよつとこれまず、ん?(∵)』

すると砕け散る氷の中からスツーと刀が飛び出てくる。

日番谷は避けようとするシュトリルを避けられてる前に

日番谷の刀が貫く。

シュトリル『ッ!!』

(痛つてー!!!!てか、これはやばい!!!!逃げないと。)』

日番谷の刀に冷気が貯まっていくのがシュトリルはわかった。

日番谷『竜霰架!!』

バキーン!!

シュトリルを焦点に大きく十字の氷の塊が出来る。

シュトリル『(……さみく。あー、でも風がないだけ吹雪の凍土よりましか。

さて、向こうはやったとでも思って欲しい。時間稼ぎ時間稼ぎつと。)』

日番谷『……やったの……か?』

日番谷は妙な手応えの無さに困惑していた。隊長クラスを予想していたが終わってみては5席や4席がいいところ。そんな感じだった。

日番谷『(今までのほまさか避けることしか出来なかった。反撃出来なかったのか? それにしてもあの余裕は一体? 俺の策が上手く行ったにしてもその前のあの攻撃。あれが奴の最後の力を振り絞った物なのか?)』

すると。

松本『隊長く。大丈夫ですか。』

ルキアを背負った松本が姿を現す。

日番谷『松本!! まあ、二人とも無事でよかったです。』

ルキアはグツタリとしているが松本はピンピンしていた。

ルキア『すいません、松本副隊長。日番谷隊長にもご迷惑を』

松本『いいのよ。で、見事に凍ってますね。』

氷付けになったシュトリルを松本とルキアは見る。二人は安堵の表情を浮かべる。

しかし日番谷はまだ納得できないでいた。

日番谷『（… 考えたってしかたねえ。ん？）』

ここで日番谷はある疑問が浮かぶ。

日番谷『松本。さっきの奴の攻撃どうやって防いだ？』

同じ攻撃を受けたのに松本とルキアでこんなにも差が出ていることに日番谷は疑問

に思った。

松本『ああ! あの攻撃、衝撃は凄かったですけど痛みとかダメージ? 見たいの

は全く無かったですよ。』

あ! 聞いて下さいよ隊長く。さっきの攻撃、体のツボ見たいかと処に当たったのか。

逆にピンピンしてるんですよ。』

日番谷『…ルキアは？』

ルキア『私ですか？私は…えーと、運が無かったのか当たった衝撃で体が回転しながら落下してしまつたものですから。まあ、お恥ずかしい話、その、酔つてしまつて。』

二人の話を聞いてより不思議に思う日番谷。

松本『いいのよ。そんなこと話さなくて。』

日番谷『じゃああの攻撃で別にダメージを受けたわけじゃねえんだな。』

ルキア『はい…あのそれがどうしましたか？』

日番谷『いや、なんでもねえ。』

（…なんだ。何なんだこの違和感は？奴の始め、初っ端の攻撃は始解状態のおれに確実にダメージを与えていた。だから奴は正解状態の敵相手にも本気を出せば倒せると踏んで本気を出した…違う。奴は初めの始めから避けることに専念し、こちらの様子を見ていた？いや、手の内を探っていた？）

松本『隊長？やつつけたんならそれで良くないですか？』

しかし日番谷は考え続けた。

日番谷『待てよ。そもそもなぜ奴は時間稼ぎのような真似をした。それは自分以外に誰か仲間がいてそいつらを逃がすためか？いや、それなら攻めてくる。少しでも戦力

を削り仲間に敵が行かないように。

仲間には俺達の戦力をさらすためか？どこかで俺達の行動や攻撃を見させ。こいつはその情報を引き出す。…いや、微妙に違うような。』

松本『隊長く〜!!!』

日番谷の耳元で松本が怒鳴る。

日番谷『うお?!?てっ、耳元でうるせえぞ松本!!』

頭に来たのか怒鳴り返す日番谷。彼からしてみれば考えていた最中に邪魔されたのだから切れる理由はある。

松本『隊長が話聞かないからでしょうが!!!』

が、倍の声で怒鳴り返される日番谷。松本と日番谷の身長差がより大きくなったようにも見える。

そしてそんな光景を氷の中で見てたシュトリルは

シュトリル『…』

(なんか、懐かしいなあ。早くマザーシップ戻りたい。)』

8話

黒崎一護は苦戦していた。

ドゴーン！

大きな土煙が立つ、その場所は黒崎が始めにシュトリルと退治した河川であった。誰かが闘っているのが一目で分かる。

一護「くそ!!」

卍解している一護の礼装はボロボロになっていた。顔は土埃にまみれ、左腕はフラフラとして使い物にならないでいる。その原因は血まみれになってる左腕である。

???「どうした黒崎一護よ。我が闘争を静めるのでなかったのか。」

敵の正体は巨匠、ダークファルスエルダーである。黒く禍々しい鎧のような皮膚に背中には大きな大剣を背負っていた。が、まだ彼は拳でしか闘っていない。エルダーにとつて一護は剣を抜くほどの相手ではないようだ。

一護「(どうする。完全に左が使えない。動かすだけで痛みが出ちまう。このまま空を飛んで逃げるか? いや、それこそ駄目だ。)」

今の一護が唯一勝っている点は空を空中を飛べることだろう。嘘化すれば確かにエ

ルダーとは良い勝負にはなるが、あくまで万全の状態での話。左腕が丸々使えない今エルダーは空に浮かぶ一護をただただ見つめるだけであった。

それにここでこんな敵を野放しにしたらどんな被害が出るか、ましてや自分に家族被害が出たら悔やんでも悔やみきれない。そんな感情も交じっていた。

一護「(奴の硬いイエロのような皮膚を貫くには奴に月牙天衝を至近距離でぶつけるしかないのか……。) な!？」

地上からエルダーは一護めがけ一直線に跳んできた。エルダーは空を飛ぶ事はできないが、一護に向けて跳ぶ事は出来た。

思いもよらない方法で迫ってくるエルダー。

一護は瞬歩でかわす。エルダーの拳が空を切る。着地したエルダーはただただ一護を見る事しか出来なかった。しかしさつきまで一護がいた場所にはやはり一護はいなかった。

その一方で一護は瞬歩で建物の屋上に身を隠し、エルダーの様子をうかがっていた。

??? 「黒崎一護。」

その言葉に振り向く。その声の正体は弓親であった。

一護「弓親!! どうしてここに。」

弓親「まったく君はどうして僕らに連絡をしない。」

一護「すまねえ。今それどころじゃ」

再びエルダーのところへ行こうとする一護だが、弓親が止める。

弓親「待ちなよ。よく見てみな。」

一護「なんだよ。」

下のある方向を指さす弓親。その指の先を目で追っていく一護。

するとそこには。

斑目「だあ！せい！はあ！」

エルダーに薙刀で挑む斑目一角の姿があつた。エルダーは避けるそぶりもせず、ただ立ち尽くし斑目の攻撃を受けていた。

エルダー「……黒崎一護をどこへやった。」

斑目「ぜんっぜん効いてねえなあ。」

一護は空高くにいたため、エルダーは少なくとも目の前に現れた斑目が一護を庇つて、一護の仲間だと判断した。

エルダー「貴様、黒崎一護をどこかへやった。」

斑目「あ？なんだ。そんなに一護に興味があるのか。」

エルダーは斑目を睨みつける。斑目も構える。斑目は自分の隊長よりもいかつい体格をしてるエルダーにたいし、多少恐怖があつた。だがそこは威勢の良さと勢いで自分

自身も誤魔化していた。

斑目「そんなにあの腰抜けと戦いてえなら、この斑目一角様を倒してからにするんだな。」

エルダー「斑目一角：．それが貴様の名か。」

エルダーは斑目に自分の体の正面を向ける。

エルダー「我が名はエルダー、ダークファルス・エルダー。我が存在意義は闘争、さあ斑目一角よ。早々にくたばってくれなよ。」

グルングルンと腕を回すエルダー。驚きの顔を一瞬見せた斑目。

斑目「へえ。どう言う風の吹き回しだ。」

斑目はエルダーに思わず尋ねた。どこか斑目の心になぐつと来たのだろう。

エルダー「名乗られたから名乗ったまでよ。それが古くから語り継がれる戦いの礼儀だ。少なくともそう記録している。」

斑目「記録？まあ、さっさとおっぱじめようぜ。」

新たに浮かんだ疑問を吹き払う。戦いに言葉はいらない。あえて語るとしたら力
でだ。

エルダー「ゆくぞ!!」

そことは別の場所。

日番谷「！斑目も始めたみたいだな。」

松本「ええ。しかし隊長。」

ルキア達3名の死神はシュトリルを凍結して拘束に成功した。しかし、彼らには不安なことが合った。

ルキア「作戦の場所とは余りにも違う所から出て来た斑目の霊圧。」

日番谷「確かに、何か作戦の変更があれば地獄蝶で連絡があるはず。」

松本「どうしますか隊長。」

日番谷「(こいつの見張りもある。一人は確実にここにいるべき。だが何だ、やはりさつきからぬぐえない不安が……。作戦の計画通りに進んでないからか？でも、ここは。)

朽木副隊長、ここはまかせろぞ。」

ルキアは副隊長と呼ばれたことに驚き、二人とも隊長が本気なのだと言うとも理解した。

ルキア「わかりました。お任せ下さい。」

その言葉を聞き、コクリと頷く日番谷。

松本「まかせたわよ。」

そう励ましの言葉をかける松本。

そして家の屋根を飛び越え飛んでいく日番谷と松本。それを見守るのはルキアだけではなく、シュトリルも冷たい中見守っていた。だがもう一人いた。

空を飛び、作戦本部である公園に向かっていた。本来はそこに構えた結界を使いシュトリルを捕まえる予定だった。だがどうも裏をかかれてるような、少なくとも作戦が見破られてるような気がしてならない。日番谷はまた一人黙々と考え込んでいた。

松本はそんな隊長が気が気でない。こう言う時の隊長に

刀を握らせるのは危ない、自分の中で結論が出るまで考えを抱え込みやすいのもそうだ。そこにあの子が関わりをもつとマズい。今回の捕獲作戦には事前にも5番隊に連絡を入れ、1番安全な役回りになっている。だが、不安、ただただ不安。何か忘れてるのか、それとも何か起こるのか、分からないが松本は不安でしょうが無かった。

隊長といえども松本にとってはまだまだ子供。そもそも松本が隊長を親元から引き取ってきたのだ。副隊長という立場もあるが、自分がストッパーにならなければならぬ。

松本「(ん、地獄蝶)

隊長!!地獄蝶です、えーと誰?ですかね。隊長?隊長く!!」

そんな松本に横から地獄蝶が飛んできた。日番谷は最後の呼びかけでようやく気付いてくれた。誰だか分からない。だからこそ松本は地獄蝶が伝える内容を真剣に聞いた。

日番谷「どこからだ松本。松本？」

松本「……え? ……え?!?!」

日番谷が松本の様子がおかしいことにすぐ気がついた。

松本は地獄蝶の内容が内容だけに理解できなかつた。言葉は短く「ここで待つてる。」、ただそれだけ。だが忘れもしない、自分のために自らを騙し、仲間を裏切り、自分を斬つてまで全力を尽くした彼を松本は思い浮かべた。すると目から涙がこぼれる。

日番谷はよほどのことが松本に起きたと理解した。何が起きたのか。それは松本にしか分からないことだ、だが隊長として部下の異常事態も対処するのも当然の勤め。

日番谷「松本。……何があつた。」

松本「隊長。嫌だなあ、何も起きてないですよ。定時連絡ですよ、ただの。」

松本はすぐに明るく人を小馬鹿にするように話す。だが、日番谷はすぐに嘘だとわかる。松本はなにか大事なことを隠している。

だが松本は。

松本「すみません隊長、すぐに追いつきます。公園で待つていてください。」

そう言い残すと日番谷の返事も聞かず、松本は瞬歩でどこかへ消えてしまう。

日番谷「!!松も…と。」

ことの重大さを今認識した日番谷。松本が任務中に泣き出すなんてこと今まであっただろうか？情けをかけることがあっても、泣き出すなんてことは無かつたはず。正解して霊力も弱ってる日番谷に全力で移動する松本に追いつくのは難しい。ならば松本の霊圧をたどり日番谷は考える、松本が飛び出した原因を。

日番谷「(あいつが訳も言わず飛び出した原因？なんだ？特例の任務が松本にくだった？いや、それなら何かしらの反応を松本がくれすはずだ。極秘なら…ねえな、そもそもあいつ個人だけつてのがあり得ない。二番隊ならまだしも。緊急の応援要請？むしろそれならおれに相談するはずだ。そもそも何で泣いた？あいつが泣くほどの原因…誰かが亡くなった？この任務中にか？そうなら松本の知人か？ルキアや斑目達の場所は違う、現に霊圧も感じる。5番隊の連ちゅ…)」

そこで日番谷は雛森の霊圧が薄くなって行くことに気が付く。いやな汗が噴き出す。もしも松本が日番谷をだまして行っているのではなく、気遣っているのだとすれば。日番谷は松本も雛森も共にいい仲だと知っている。だが、雛森に万が一、もしものことがあると、日番谷自身抑えきれないことは日番谷はもちろん松本も知っている。だからか？松本は自分に気遣ってこのことを伝えなかつた。

日番谷「雛森!!」

真つ直ぐに雛森の所へ飛んでいく日番谷。焦って不安で落ち着きがない霊圧は誰もが感じ取った。

で、その雛森はというと。

雛森「おいしい。」

お茶をすすっていた。

ズドーーーーー!!!

そんな雛森、いや休憩中の5番隊の近くに日番谷が頭から地面に刺さる。日番谷は内申ホツとしながらも。

雛森「え?…え?!?!? シロちゃん?!?!?」

雛森に対してフツフツと怒りがこみ上げてきた。シロちゃんというのは止めろとあれほど言ってるのに、なぜこうもピンピンしてんだちくしょう。未だ地面に顔を突っ込

ませ長らく我慢していた。

日番谷「全然大丈夫じゃねえか。それと……。」

その怒りは隠せていても霊圧はピンピンに出た。5番隊からしてみれば、霊圧が荒れていた何者が猛スピードで地面に激突し刺さったと思えば、それは日番谷隊長で雛森副隊長が心配して駆け寄ったと思えば、今度はどんとどんと濃くなっていく日番谷隊長の霊圧で、なんか怒っているのは分かったが、全体的に何が何だか分からずじまい。何でいきなり人がしかも隊長各の一人が振つてきた。疑問は色々ある。

だが少なくとも、休憩してる場合じゃないと5番隊は理解した。

雛森「シ、シロちゃん？あの、どうしたの。」

ズボツと顔を出す。そして、雛森の顔を握りながら言った。

日番谷「おい雛森。シロちゃんって言うのやめろって確か前にも言ったよな。」

雛森「いや!?だって、いきなりシロちゃんじゃなくて日番谷隊長が落下してきたから。」

日番谷「はあ。全く。」

それも聞くと確かに自分の方がよっぽど変人じゃないかと内心日番谷は思った。そして、5番隊の隊長が現れる。

平子「ナンやナンや?誰かと思えば、日番谷隊長さんやないか。いきなり、隊長、空

からお子様なんて言われてきてみれば、おもんないなあ。」

日番谷「誰がお子様だ、誰が。」

またまた日番谷の怒りが貯まるが、平子の言葉で思い出す。

平子「そう言えばお前さんはなんでこつちにきたん？」

日番谷「いや雛森の霊圧が急に薄くなっただけ。」

雛森は頭から地面に刺さったと日番谷の土やら葉っぱやらの汚れを払いながら答える。

雛森「シロちゃんつたら、ほんとに心配症なんだから。なんでちよーとホツと休憩していただけなの。」

日番谷「ひーなーもーり！」

雛森「ああ、ごめん日番谷隊長」

そんな微笑ましい光景に思わず平子は嫉妬した。それと同時にあることに気付き指摘した。

平子「はあ!?!何で休憩中やのにストレス貯めなアカンねん。ホンマお前何しに来たん?張り倒すぞマヌケ。てか、お前さん一人なのか?」

その言葉に日番谷はあることを思い出す。

日番谷「そうだ!雛森、平子、こつちに松本が来なかつたか?」

その答えに雛森はいえと首を振る。その後雛森は平子を見つめる。平子までもいいえと首を振る。

日番谷「そうか。」

(ならどこに行つた、松本。)

平子「ナンヤ? あんたの所の副隊長さんやろ、松本つてのは。」

コクリと日番谷は頷く。平子は目が鋭くなり、威圧するように言う。

平子「何があつた。」

最初はためらつていた日番谷。これは自分と松本との間での問題。それに自分一人でも対処出来るもので、雛森に心配をかけたくないと言う思いがあつた。

だが、話すだけ話すべきだろうと日番谷は思う。他の奴らに聞けば他の意見も出て来るかもしれない。松本が何を考え思つて動いたのか、今の日番谷には分からなくなつていたからだ。

日番谷「… 松本が任務を投げ出して何処かへ消えた。」

日番谷は起きた事を話す。ここに飛んできた理由も。平子が「お前さん、やつぱり雛森のこと好きなんやろ。」と小馬鹿にされつつ話す。そんなこんなで彼らに話した。

雛森「乱菊さんが泣くほどの出来事。」

雛森には

その頃の松本。枯れた木に木の葉が舞う。そんな林の中。地獄蝶の送り主を見つけ
る。忘れるはずがない、幼い時からの知り合い。あの蛇のような独特の雰囲気を持って
いる彼を。

第9話

枯れた木に木の葉が舞う。不安そうな松本を月光が周りを照らす。あの人の姿を忘れるはずがない。心のどこかで引かれていた、ただあれを取り返すために奮闘してくれた、自分がどんなことになるうとも私のために。

しかし嘘の可能性もある。このことを知っている誰が自分だまして罠にはめようとしている。そんなことはすぐに思いついた。だが、でも、あの地獄蝶は彼のだという確信があつた。君に会いたい、それだけだ。松本は誰からだろう、と考えたとき彼の事を思い出した。いや、まさか、あり得ない、でも、もしも、ほんの少し、もう一度会えるとしたら。

月光が照らしたのは松本だけではなかった。地獄蝶の送り主も照らす。松本はまた涙を流す。

しかし近寄る松本を拒む。彼は彼であつても彼ではない。それを理解してる彼は誰であろう。

その頃の浦原商店。

マキナ「ええ、少なくとも私達は敵対する意志はありません。あくまでダーカーの殲滅が優先なので。」

マキナは夜一を保護した理由や訳、そしてアークスについての補足をして説明をした。

浦原は半信半疑であった。別に嘘をついているようには見えない。だが、他の宇宙から来ただとか、星を追われた者たちの集団だとか、星丸ごとダーカーと呼ばれるに汚染されるとか、鵜呑みにハイそうですかと言える物ではない。

浦原「うーん。スケールが大きすぎてイマイチ実感が掴めないと言うか、なんというか。いや、夜一さんを保護してくれた所は感謝してますよ。」

夜一が行方不明なのは事実。だが、記憶喪失をしていたとは驚きである。多少医療の心得があるのでほぼ治りかけとはいえ、記憶に欠落してるのもまた事実。

夜一「まあ、わしからしてみれば命の恩人みたいな人達じゃからな。」

そう言うと夜一はお茶をすする。

鉄斎「マキナ殿、少し宜しいですかな」

正座をして聞いていた鉄斎が話に入る。因みに夜一はあぐらをかいて鉄斎の横にい

る。

マキナ「はい、私に答えられる事があれば。」

鉄齋「では、初めシユトリル殿のサポートパートナーと自分の事を申されていましたが、そのサポートパートナーとはなんですか？」

マキナ「ああ、その説明をしていませんでしたね。サポートパートナーと言うのはある程度、まあ初心者から初級のアークスが使用出来る補助システムです。」

浦原「補助システムですか？」

浦原までハテナマークを浮かべるような顔をする。鉄齋も理解してないのか、顔にしわが寄る。

マキナ「補助システムと言うのは先ほど行つた通り、初心者から初級のアークスが使用出来る、アークス個人の生存率や戦闘力などの向上を目的に設立されたシステムの一環です。」

私達サポートパートナーはアークス一人一人に配布される自動独立型戦闘AIとも言えば良いでしょうか？」

浦原「…ん？」

そのハテナマークは三つに増えたようにマキナは感じた。やはりマスターであるシユトリルに合せてあるためか、他の人との意見交流に時々こうなる。初め、この

キヤツス達ともこんな感じだった。

すると見かねたリユシが補足をする。

リユシ「サポートパートナーと言うのはアークスが使用出来る専用のお人形みたいなもの。マキナにはちよつと悪いけど、完全な機械人形でこう言った感情も自己学習と元々のプログラムで構成されてるの。もつと簡単に言うとそのアークス専属のメイドさんとかヒツジさん。

で、サポートパートナーの主な目的はもちろん戦闘のサポート。だけど、そのアークスの体調管理や精神サポートもこのサポートパートナーの仕事。そのアークスが苦手とする項目の代行とかも出来るように作られてるって話を聞いたことがある。で、最大で三人まで雇えるのよ。あ、シュトリルさんのサポートパートナーはマキナさんだけだよ。」

むふむふとマキナを見つめる浦原。鉄斎は確認をするようにリユシに尋ねる。

鉄斎「なるほど、いわばシュトリル殿にとっては嫁のような存在と言うわけですか。」

リユシ「いや、それはちよつと・・・。」

リユシやナーコヤは違うと思う。顔にもそれが出ている。だか、マキナは微笑んでいる。お世辞で言われたとしても嬉しそうな笑顔である。

浦原「って、そのシュトリルと言うのはどなたですか？」

マキナ「私のマスターは現在、外で信頼できる相手を探しています。」

浦原「信頼できる相手？」

マキナ「はい、失礼になりますが、こちらでの交渉が失敗した時に次の交渉相手を見定めるのが目的です。」

その言葉に浦原や鉄斎の気配が変わる。その気配を感じ取ったのかりユシやナーコヤも身が硬直する。夜一も先程までリラックスしていたが、それをやめる。

始めに切り出したのは浦原の方だった。

浦原「交渉……ですか。」

マキナ「はい。」

浦原「単刀直入に、目的は？」

マキナ「ある死神の保護と活動拠点の提供。そして、私達の存在を庇ってください。」
浦原「存在を庇う……ですか。なぜ？」

マキナ「先ほども言いましたがダーカーの殲滅が私達のアークスの目的です。しかしダークファアルスの存在が確認された以上、居場所を知られてはならないのです。ダークファアルスには人並み以上の知性ありますし、我々もダークファアルスの討伐を狙っています。少なくともダーカー因子が少ない貴方がたならダークファアルスとの接触はないと判断しました。」

浦原「貴方がたがそのダークファルスではないという証拠は？」

マキナ「残念ながら証明できません。」

浦原「そのダークファルスとの和解は。」

マキナ「無理だと考えてください。ダークカーにもダークファルスにもダークカー因子を用いた汚染があります。ただ会話するだけでも汚染すると思ってください。」

浦原「ある死神の保護とは。」

マキナ「それは交渉が成立したときに。マスターであるシュトリルから、また上司でもあるシュトリルからの命令で私達アークスはその情報の提供を禁止されています。」

浦原「マスターからの命令でねえ。そう言えば交渉とお宅ら言いましたよね。なら、こちらに何かメリツトは？」

マキナ「この時代に沿った範囲内での技術提供。夜一さんについていた者はあなた方が作られたと判断しました。ゆえにその装置や他の武器防具とうの技術提供がある程度、あなた方の現在の文化、文明、知識を超えない程度で。」

浦原「文化、文明、知識を超えない程度とは具体的に？」

マキナ「見たところ特殊な人種な方々であるのは間違いと判断しました。故に今の所、貴方が作られた物。現在位置特定可能な地図機能内蔵の連絡用端末をより良い物にいたします。実際は物を見てからでないとできません。」

浦原「活動拠点の提供については。」

マキナ「この家には地下に特殊な広い空間があると断言します。故にその極一部を文字通り提供してくだされば結構です。」

浦原「そこまでわかっていたんですか。」

マキナ「ここらへんの地理や地図。高いエネルギーの反応がここにもありましたし、何人かの死神が入りしていたのを確認しました。何かあるとはわかっていたんですか、確信したのは夜一さんからの情報です。」

浦原「まったく。夜一さん、元2番隊の貴方が……はあ。」

マキナ「交渉してくれませんか。」

浦原「……」

浦原も決めかねていた。確かにこの人達は信頼できる相手だろう。むしろ敵に回す方が危ない、それこそ虚圏《ウエコムンド》にいる残党の破面《アランカル》なんかと接触し、手を組まれる方が危険である。この人達はわずか数人で空倉町の調査をやつてのけた。さらにこの人達は死神や嘘《ホロウ》が見えている。そして一番厄介なのは技術力の高さだろう。交渉にもあったが文化文明知識を超えない範囲内と言うことは、鵜呑みにするとこの人達は自分達より文化も文明も知識も上だと言うこと、それも遙かに。

しかし、いくら夜一さんの恩人とはいえそう簡単に了承できない。この人達を受け入れると言うことはあの蜘蛛や蟻を完全な敵としてみると言うことだ。護廷十三隊や総隊長の結論が出ていない中、自分らで決めるのは少し危険だ。そしてこれだけの技術力があるのなら、もしかすると瀟霊廷の全ての情報を抜かれる事だってある。それはかなり危険。

それに死神の保護、これをそう簡単に見逃せない。内容が開示できないのはそれだけ重要な事だからだろう。もしかすると保護した死神は行方不明になった8番隊の隊士かも知れない。その可能性は十分ある。

シュトリルと言う奴は脅しをかけてきているのは間違い。仲間を見捨てたくないなら手を貸せと。そして夜一だけ返したのは人質。正確には夜一の記憶だと思われる。未だ一部の記憶がない。自分達の手でもそう難しい事ではない、だがこの人達が細工をし、爆弾のような物を仕掛けていたら最悪夜一を殺すことにもなる。

そう浦原が考えていると。ドタドタドタと階段から誰かが降りてくる。そしてダン!!とふすまが開く。出て来たのは赤髪をした少年であるジン太だった。

鉄斎「ジン太殿!!今は入って来ては」

鉄斎が怒る。だが、それを吹き飛ばす用にジン太は言う

ジン太「コンの様子がおかしいんだ!!」

それに一瞬驚く浦原と鉄斎。しかし、今は大事な話し合いの最中。それどころでは無いのが事実。ならば、手が空いている物に行かせるべき。

浦原「夜一さん、帰ってきて早々ですがお願いできますか？」

夜一「ん？まあ、喜助の頼みならしょうがないかの。席あけるぞ。」

マキナ「私達は構いません。」

夜一は焦るジン太と共に出て行く。ジン太の焦りようから、何か起きてるのはわかっている。手を組む方が良いと思うがやはり迷いがある。

浦原「さて、こちらはどうしたものか。鉄斎さんはどう思います。」

こう言う時は他の人の意見を聞くべきか？と思ひ浦原は鉄斎に尋ねる。

鉄斎「私ですか。そう、ですね……。所々あいまいな点が気になります。本当に味方になりたいならそう言う意思を向けるべきかと。」

数秒間の空白。マキナは呆れたように口を開く。

マキナ「もしかして夜一さんを連れて来た意味わかってませんか？」

浦原「どう言う意味ですか？」

浦原は身構える。やはり夜一を解放した理由は人質。だが。

マキナ「そう身構えないでください。えーと、夜一さんはアークスではないですよ。」

浦原はマキナの真意が読み取れなかった。鉄斎もそうであった。何を言いたいのか、

この二人には悟れなかった。いや、勘違いしたというのが正しいだろう。

浦原「ん?…ええ。」

浦原は夜一を人質としてより強調していると思っていた。むしろ夜一がこの人達から離れ、ある意味チャンスどうすれば良いのか。すると鉄斎はある考えにいたる。

鉄斎「あの。マキナ殿はもしかして喋れないから夜一殿に聞いてくれとおっしゃりたいのですか?」

鉄斎はマキナがアースクと言う組織に入ってるため喋れないから夜一に聞いて欲しいと言っているのでは?と思った。

マキナ「それについてアースクの私は、アースクの!!私は!!お答えできません。」

浦原「あ、どうりで夜一を連れてきた訳ですね。」

ここで流石に浦原も察した。用は詳しいことはあんたらの仲間である夜一にきけと言うことに。確かに夜一はアースクの所属などしていない、それにシュトリルと言う部下の命令もしくは直接コレを言うと情報流失を行った疑いになる。だからマキナは言葉を選び話していた。

マキナ「黙秘しますね。さすがにアースクからの首チョンパが来そうなので。」

浦原「お宅も大変なんですね。」

グテンとちやぶ台に伏せるマキナ。そんなマキナを心配してか浦原は声をかける。

マキナ「ノーコメントで。マジでこの人達信頼して大丈夫なんすかねえ。」

リュシ「そ、そんなこと言わないでほら。」

ナーコヤ「まあ、人間色々いるから。」

そんなことを話しているとまたドタドタと階段を駆け下りる音がする。そして戸を開けて夜一が入ってきた。

リュシ「あ、夜一さん。いいところ」

夜一「すまんマキナ。こいつ頼めるか？」

夜一の焦りようから事の重大さを理解した。浦原や鉄斎はどこか不思議そうに、マキナは驚き、リュシとナーコヤは少し怖がる。

リュシ「ヒツ!!」

ナーコヤ「ウツ：：!!」

マキナ「これは。。。」

そこには大きな白く濁った花を咲かせてるライオンのようなぬいぐるみがあった。コンである。が、花の大きさは明らかにぬいぐるみとのバランスがおかしく、ぬいぐるみの栄養を吸い取って花が成長してるように見えた。

夜一「行けるか？」

苦虫をかみつぶしたよう顔をしたマキナ。

マキナ「今の設備では不可能です。開花してここまで大きく成長してしまっているの。正直な所、現状維持も無理臭い状況。むしろここまでのレベルに達すると自我が無く死体であるがために即刻殺処分です。クラス的にもベリーハード推奨以上のエリアにしかないのです、出来るだけ善処してみます。」

じん太「殺処分ってコンを殺すのかよ!?!と言うかいま死体って事は…。」
ウルルが不安そうな顔をしているのにじん太は気づく。

鉄齋「じん太殿ウルル殿…。」

じん太「大丈夫…なんだよな。」

マキナ「一応、今の設備で出来る時には出来るのですが…。正直、ここまで体が脆いと肉体の方が持ちません。相当な力技ですし悪化していると体が…。」

浦原「いや、肉体面は大丈夫かと。少なくとも核、擬魂丸が無事ならこちらとしてはコンさんは助かるかと。」

マキナ「核?ならそれを取り出したり、外部への避難は可能性ですか。」

浦原はコクリと頷き、続けて言う。

浦原「こちらで取り出しますので、その間に準備をお願いします。」

マキナ「鉄齋さん。下の空間お借りできますか。」

その問いうんと頷き、

マキナ「ナーコヤ、リュシ。下見お願いします。なるべく広いスペースの所で頼みます。」

2人も頷く。そして鉄齋のあとをついていく2人の姿を見送った。